

# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 18 No.5, 2011



Bern INQUA 大会最終日の総会で、2015年大会の名古屋開催決定を受けて招致計画を説明し、聴衆を招待する齋藤文紀招致委員長（撮影：奥村晃史）

Vol. 18 No. 5

October 1, 2011

INQUA 大会案内 . . . . .	2	INQUA 分科会 . . . . .	12
2011 年大会報告 . . . . .	2	委員会設置 . . . . .	13
新役員 . . . . .	3	投稿規定 . . . . .	14
学会賞・学術賞 . . . . .	3	教員公募 . . . . .	15
論文賞・奨励賞 . . . . .	6	幹事会議事録 . . . . .	15
功労賞 . . . . .	7	評議員会議事録 . . . . .	16
大会シンポジウム . . . . .	8	資料 . . . . .	21
普及講演会 . . . . .	8	総会議事録 . . . . .	26
大会巡検 . . . . .	9	学会会則 . . . . .	26
緊急シンポジウム . . . . .	9	会員消息 . . . . .	27
研究委員会 . . . . .	10	研究助成募集 . . . . .	27
INQUA 招致 . . . . .	12	セミナー 展示 . . . . .	28

## ◆ INQUA2015 年大会、名古屋に決定

国際第四紀学連合の第 19 回大会 (The International Union for Quaternary Research: INQUA XIX Congress) は名古屋において開催されることが、ベルンで開催された第 18 回 INQUA 大会で正式決定されました。会員及び招致委員会の皆様のご協力とご支援に、改めて御礼申し上げます。いよいよ INQUA 名古屋大会 2015 に向けての準備が始まります。日本第四紀学会では、日本学術会議の INQUA 分科会と合同で、国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会を徳島大会で設置致しました。INQUA 名古屋大会は、日本の第四紀および第四紀研究をよりよく理解してもらえよう、成果を世界に発信するとともに、海外の最前線の研究をより身近に感じ、日本の研究がそれらと密にリンクすることを示してゆきましょう。INQUA 名古屋大会は私たちにとってたいへん貴重な機会であり、大会への参加は 2015 年以降の私たちの活動に、必ずや活きると思います。名古屋大会まで 4 年を切りました。大会に向けての皆様のご積極的な参加と、引き続きご支援とご協力を頂きますようお願い申し上げます。

日本第四紀学会会長 遠藤邦彦

招致委員会委員長 齋藤文紀

INQUA 副会長 奥村晃史

・ 期日：2015 年 7 月 27 日 (月) ～ 8 月 2 日 (土)

・ 会場：名古屋国際会議場

・ テーマ：Quaternary Perspectives on Climate Change, Natural Hazards, and Civilization

・ 主要サブテーマ：

・ Quaternary science for natural hazard mitigation

・ Understanding and quantifying past changes in the Earth to improve projections of future climate, sea-level, and environmental changes

・ Dynamics of the human environment interaction

・ Developing and integrating new technologies for Quaternary chronology and stratigraphy.

・ 合計 20 以上の巡検 (予定)

招致提案書は以下のサイトでご覧になれます (各種料金や巡検等は、現時点で多少とも暫定的であることをご理解願います)。INQUA 名古屋大会に関して、ご意見やご要望等ありましたら、些細なことでも結構ですので、組織委員会事務局まで、メール頂けますようお願い致します。

組織委員会事務局 (inqua2015-k(at)m.aist.go.jp)

## ◆ 日本第四紀学会 2011 年大会報告

日本第四紀学会 2011 年大会が、8 月 26 日 (金)～8 月 29 日 (月) の 4 日間にわたって、鳴門教育大学 (徳島県鳴門市) において開催されました。一般研究発表は、26 日と 27 日の 2 日間にわたって行われ、口頭 50 件、ポスター 26 件の発表がありました。28 日午前には公開シンポジウム「環太平洋の環境文明史」、午後には普及講演会「徳島で考える地震津波と防災—東日本大震災からの新たな教訓—」が行われました。また、年輪年代学のオープンラボが実施されました。大会参加者数は、26・27 日の一般発表では、名誉会員 2 名、正会員 117 名、正会員 (学生) 4 名、非会員および不明 34 名の合計 157 名、28 日の公開シンポジウムでは 100 名、普及講演会では 120 名でした。一般研究発表では、今大会から若手・学生会員を対象とした発表賞が企画され、口頭発表については、会長から推薦された 10 名の正会員による審査・投票、ポスターについては、大会参加者全員による投票が行われました。口頭発表の審査とコメントをお引き受けいただいた、小野 昭、竹村恵二、百原 新、横山祐典、植木岳雪、原田尚美、川村賢二、豊田新、中尾賢一、西山賢一の各会員にはこの場を借りて、お礼申し上げます。

26 日の夜と 27 日の午前には、それぞれ評議員会と総会 (出席者 89 名、委任状提出者 151 名) が開催され、2010 年度の事業・決算・会計監査、第 19 回 INQUA 大会招致準備委員会など各種委員会、および各研究委員会等の報告と、2010 年度事業計画・予算案の決定等の審議が行われ、承認されました。また、会費の減免についての会則の改定、「第四紀研究」の投稿規定・執筆要項の改訂、第 19 回 INQUA 大会組織委員会の設置、教育・アウトリーチ委員会、渉外委員会の設置が評議員会で審議され、総会で報告されました。総会終了後、学会賞 1 件・学術賞 2 件・論文賞 1 件・奨励賞 1 件、功労賞 11 件の授与式がありました。

27 日の夕方には、鳴門教育大学学生会館第 1 食堂にて懇親会が開かれました。参加者は 80 名でした。遠藤会長・米延大会実行委員長の挨拶、小野副会長の乾杯から始まった懇親会は、歓談、功労賞受賞者の挨拶を経て、最後は竹村副会長の挨拶で締められました。また、懇親会では、口頭発表賞 (若手部門：星野安治さん、井上麻夕里さん、学生部門：中村淳路さん、川久保友太さん)、ポスター発表賞 (若手部門：大石雅之さん、近藤玲介さん、学生部門：川久保友太さん、弦巻賢介さん) の計 8 名の受賞者が発表され、賞状と副賞の地元特産品の半田素麺が贈呈されました。

29 日には、「百万年前の東四国を探る」と題するアウトリーチ巡検が行われました。猛暑の中、参加者は小学生を含む 56 名でした。2 台のバスを使用して、四国の美しい景観を楽しみながら、四国を代表する更新統の土柱層の層相や中央構造線活断層系の活動履歴を示す露頭を観察することで、四国東部の地形

発達を考えることができました（詳細は本号のアウトリーチ巡検報告をご参照ください）。

最後になりますが、お忙しいところ、早くから大会準備を進めていただき、心のこもった素晴らしい大会運営を行っていただいた大会実行委員会の鳴門教育大学・米延仁志委員長、徳島県立博物館の中尾賢一会員、徳島大学の西山賢一会員、鳴門教育大学の山田和芳会員をはじめとする運営スタッフの皆様に、心よりお礼申し上げます。

（前行事担当幹事 三浦英樹）

## ◆日本第四紀学会 2011～2012 年度役員名簿

2011年8月1日～2013年7月31日の新しい役員と評議員が以下のように決まりました。学会活動が益々活発化するように努めて参りますので、どうぞよろしく願いいたします。

会長：遠藤邦彦

副会長：小野 昭、竹村恵二

会計監査：大場忠道、百原 新

幹事：久保純子（幹事長）、水野清秀（庶務）、北村晃寿（庶務）、三田村宗樹（庶務）、池原 研（会計）、岡崎浩子（編集）、長橋良隆（編集）、出穂雅実（行事）、兵頭政幸（広報）、須貝俊彦（渉外）、植木岳雪（企画）、高田将志（企画）

幹事会オブザーバー：奥村晃史（日本学術会議 INQUA 分科会委員長）

### 評議員

共通分野：奥村晃史、公文富士夫、斎藤文紀、竹村恵二、山崎晴雄

地質学分野：池原 研、岡崎浩子、里口保文、長橋良隆、藤原 治、水野清秀、三田村宗樹、吉川周作

地理学分野：吾妻 崇、植木岳雪、海津正倫、久保純子、須貝俊彦、鈴木毅彦

古生物学分野：河村善也、北村晃寿、澤井祐紀、高橋啓一

動物学分野：池田明彦、本川雅治

植物学分野：五十嵐八枝子、百原 新

土壌学分野：三浦英樹、渡邊眞紀子

人類学分野：小池裕子、松浦秀治

考古学分野：阿部祥人、出穂雅実、小野 昭、佐藤宏之

地球物理学分野：阿部彩子、兵頭政幸

地球化学分野：大場忠道、横山祐典

工学分野：陶野郁雄、八戸昭一

## ◆学会賞・学術賞受賞者選考報告

（学会賞受賞者選考委員会委員長：山崎晴雄、幹事会）

### (1) 選考経過

本年度の学会賞等の候補者の推薦・立候補は3月31日をもって締め切れ、それまでに学術賞に3名、学会賞に1名の候補者が推薦され、学会賞受賞者選考委員会（山崎晴雄委員長、菊地隆男、大場忠道、鈴木三男、松浦秀治各委員）にて検討された。選考委員会では推薦のあった候補者について日本第四紀学会学会賞規定、同内規に基づき、推薦文書および幹事会が収集した業績目録や学会活動等に関する資料を参照して審議を行った。なお、選考に当たり、学会賞は第四紀学会正会員としての「学術的な業績」・「第四紀学に貢献した活動」・「学会に貢献した活動」を選考基準とし、学術賞は日本第四紀学会正会員としての「学術的な業績」を選考基準とした。電子メール上での意見交換および4月29日の選考委員会で受賞候補者を決定した。5月24日の第3回評議員会において、学会賞受賞者選考委員会より学会賞の受賞候補者の答申が行われ、質疑応答の後、学会賞として成瀬 洋会員が、また学術賞として前田保夫、寒川旭会員が受賞者として決定された。

### (2) 学会賞・学術賞受賞者

学会賞

●成瀬 洋「日本における第四紀学発展への顕著な貢献」

成瀬 洋会員は、55年間にわたる日本第四紀学会の創設時以来の会員であり、計10期、20年にわたり評議員を務められ、学会の発展に対して貢献をされてきた。個人研究は南関東地域の新生代堆積物と層序を対象に学位を取得後、国内では関東ローム層、信州ローム層、北陸地域の第四系、大阪層群などの総合研究、琵琶湖底掘削計画、第四紀地殻変動研究などの共同研究チームへ参加、国際上部マントル研究プロジェクト（UMP）、国際地球内部ダイナミクス研究プロジェクト（GDP）への参加など、日本の初期の第四紀研究の一翼を担い、長年にわたり一貫してわが国の第四紀学の発展に貢献をされた。また、第11回太平洋学術会議大会（東京）に出席、研究発表（共同）と共に、この大会に企画された巡検のリーダーを務め、さらにINQUA第9回大会（ニュージーランド）、同第13回大会（北京）に出席、いずれも研究発表を行い、日本の第四紀研究の現況を伝え、諸外国

の研究者との交流を行ってきた。

第四紀学関連の著作、論文等の執筆活動にも多大なものがあり、共同研究も含めて、論文 55 編、短報 3 編、著書 14 編を公表してきた。とりわけ日本の第四紀学にとって重要な著作として、成瀬会員個人の執筆による「第四紀」(1982 年、岩波書店)は、国際的な視野の下で第四紀学の体系を示した名著であった。本書は、第四紀学の定義をはじめ、氷河作用、氷期の原因、気候変動と生物相、氷河性海面変動、第四紀地殻変動、層序学、年代学、テフクロクロノロジー、古土壌、古地磁気層序、同位体層序、レスなど、広い分野に亘る研究対象を、簡潔に分かり易く紹介しており、引用文献、参考図書のリストは、18 頁に及んでいる。この著作は、1980 年代から 1990 年代にかけて学生や若手研究者に対して多大な影響を与え、人材の育成とわが国の第四紀学発展に貢献してきた。

以上のように、本会の発展にとり多大な貢献をなしてきた成瀬会員による功績は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断する。

#### <受賞者の言葉>

定年退職後久しく研究の第一線から退き、引籠っておりましてところ、今回図らずも「日本における第四紀学発展への顕著な貢献」ということで学会賞受賞の栄に浴し、驚き且つ戸惑っている次第です。私の第四紀研究には 2 つ



成瀬 洋氏

のきっかけがあります。1 つは 1940 年代末、指導教官大塚弥之助先生の助手であった杉村 新さんに、房総半島南端部の卒研を指導していただいたことです。当時氏ははじめて、日本でも氷河性海面変化が認められることを主張し、それと地盤運動との分離という画期的な研究に取り組んでおられました。私は卒論提出後は氏のお手伝いをしながら、沼段丘はじめ地震隆起してできた段丘群の調査をしました。この仕事を通じて私は、第四紀地殻変動や海面変化をどう考えるかについて、その後の研究への決定的影響を受けました。もう 1 つは、このころ地質研連に INQUA 日本支部として第四紀小委員会(第四紀学会の前身)がつくられ、その談話会が定期的にかれるようになったことです。この会で私は、考古学・人類学はじめ異分野で活躍されている方々と識り合うことができ、大きな刺激を受けました。またそのご縁もあって、明大杉原荘介さんから、岩宿旧石器の年代問題に関してわれわれ若手の地質地形屋に呼びかけがあり、東京付近の関東ロームの日曜巡検がはまりました。この“杉原巡検”がやがて地団研のバックアップで組織化され、羽鳥謙三さん、貝塚爽平さんたちを中核に多くの教師・研究者を結集した関東ローム研究グループに発展しました(53 年)。テフクロクロノロジー、古気候-海面変化等を総合して平野の発達史を解明し編年してゆくローム団研の研究スタイルは、その後各地にひろまった第四紀総研のモデルになったかと思えます。60 年代になると大規模開発の一部として、東京湾臨

海地域の埋立にともなう海底ボーリング調査が行われるようになりました。私は関東ロームのご縁で東大生産技研三木五三郎研究室の嘱託となって、三木さんのもと貝塚さんのご協力を得て、横浜南部や京葉臨海地帯の海成沖積層とその基底の埋没地形を調べ、多くの埋没谷の存在を見つけ、また更新世末以降の海面変化について欧米のものと同様な深さ・年代ダイアグラムを描くことができました。同じころ、杉村さんから、日本列島のどこがどれ位第四紀に隆起沈降したかを定量的に表すマップを作ろうという呼びかけがあり、吉川虎雄さん・杉村さんを中心に 10 人からなる第四紀地殻変動研究グループが出来ました。出来上がった変動図は INQUA クライストチャーチ大会(1973)で展示しました。この中の隆起沈降量図の仕事は、後の私の第四紀盆地の形成発展の研究につながっています。また断層分布図は、その後新しい手法のもとで見直され、新たに松田時彦さん岡田篤正さんたちを中心に活断層研究会が誕生し、空中写真などを利用して日本の活断層のカタログ作りがすすめられました(「日本の活断層」)。

以上私の 50 ~ 70 年代の研究は、おもに分担協力者のそれで、研究のオーガナイザーやリーダーであったわけでなく、今回の受賞も面映い限りです。ただ戦後第一世代の生き残りとしては、よき先輩同輩に恵まれ、日本の第四紀学の創成・発展期に立会うことができたのはまことに幸せだったと感謝しております。

#### 学術賞

●前田保夫「堆積物と地形から読み取る完新世の海水準変動に関する研究」

前田保夫会員は、大阪湾岸地域の完新世の海面変化と植生変遷の研究を始めとして、近畿地方から瀬戸内海あるいは中部地方、更には北海道や九州まで野外調査地域を広げ、花粉分析を主要な研究手段として後期更新世における各地の環境変遷の研究を展開してきた。特に、完新世中期の高海水準に関して、堆積物から読み取る海成層上限の認定に関する基礎的な研究(第四紀研究、21、195-201、1982)から、ハイドロアイススタシーを考慮した北海道東部の研究(GRL、19、857-860、1992)など日本に留まらず、フィジーやサモアなど中部太平洋各地での完新世の海水準変動に関する研究を詳細なフィールド調査に基づいて行ってきた。中でもフィリピン大学で教鞭をとって以降、ほぼフィリピン全土でノッチの観察を実施し、完新世の海水準変動を面的に調査して、海水準変動と共に地殻変動の違いを明示し、各地の完新世の詳細な海水準変動を明らかにしてきた。このような詳細な調査に基づく基礎的なデータの収集と発表は、世界的にみても画期的である。

また、前田会員は上記の研究に関連した内容をやさしく解説した普及書を数多く出版している。例えば、「縄文の森と海」(1980 年、蒼樹書房)、「海面変動-縄文海進」(共著、1984 年、海文堂)、「先史時代の自然環境」(共著、1985 年、東京美術)、「六甲山はどうしてできたか」(1989 年、神戸自然

誌出版会)、「縄文海進と水没遺跡」(共著、1995年、朝倉書店)などがある。このように、前田会員は一般社会への第四紀学の啓発にも大きく貢献しており、この点も大いに評価されて然るべきである。

以上のように、前田会員の一連の研究は、完新世の海水準変動の理解に大きく貢献していることから日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

#### <受賞者の言葉>

このたびは全く思いがけなく学術賞を頂き光栄に存じております。ここに記して第四紀学会関係者に深く感謝します。

私のように古環境の研究をする者にとって堆積物の連続試料や化石の観察とそれらの年代測定は必須の条件です。大阪湾の環境史の復元の研究を始めた1970年初期の頃は $^{14}\text{C}$ 年代測定には貝殻では10g前後の量が必要でした。その時思いついたのは湾岸工事の沖積層のベースになっている最終氷期の海退期に堆積した河成堆積物まで掘削する潜函を利用する方法でした。幸い工事関係者の協力が得られて念願の連続堆積物と年代試料を手にすることができました。

ところがこの潜函地質調査でさらに大きい収穫がありました。それはベースの砂礫層に不整合関係で重なるラグーン堆積層、砂層、貝殻を多く含む粘土層、最上部には細砂層の順に環境の変化に応じた地層が観察できたことです。しかし完新世で海面がもっとも高くなった年代と平均海面は今一つこの潜函では確定できませでした。

話を端折りますが私は1998年に、フィリピン大学の客員教授として同国の海面変動を調査し、約600地点のノッチとそのリトリートポイント(最奥高度)を調べ、112試料について年代測定をしました。最初はノッチフロアに残るサンゴ化石の年代を測っていましたが、最近では潮間帯に特徴的に生息するヒヅメガキの化石が帯状分布の状態に残っている高さを古海面高度と認定して、年代を測っています。その典型的な露頭はフィリピン中部のSamar島のTinabananにあり、平均海面以上2.9m、年代は5120 cal BPです。

フィリピン群島は日本列島と同じく地殻変動の活発な地域であり、海面変動量については地震などによる地殻変動量と差し引きして決定せねばなりません。現在のところ5地点を選んで相対的海面変動を調べていますが、近く地球物理の研究者と協力してフィリピン群島の絶対的海面変動量を求めたいと計画しています。

#### 学術賞

●寒川 旭「地震考古学による新たな融合学問分野の創造と啓発活動」

寒川 旭会員は、地震と断層の研究に長年携わり、多くの研究業績を上げるとともに、地震に歴史的視点を取り入れた「地震考古学」を提唱し、構築・発展させてきた。

地震考古学は、考古学・文化財科学と地震学が



前田保夫氏

融合した画期的な学問領域として、今や、学際的な第四紀学を代表する分野のひとつといえる。「地震考古学—遺跡が語る地震の歴史」(1992年、中公新書)により明示された本学問分野は、関連諸学問の幅広い支持を得て、遺跡の発掘に伴う新たな古地震データの発見を促し、歴史的記述との比較検討や活断層の調査結果を併せることによって、日本における地震史や地震発生機構の理解に大きく貢献したばかりでなく、古地震がいかに当時の庶民や政治に大きな影響を与えてきたかも明らかにしてきた。

寒川会員は、個々の調査成果や学術論文を数多く公表するとともに、「発掘を科学する」(共著、1994年、岩波新書)、「揺れる大地—日本列島の地震史」(1997年、同朋舎出版)、「地震—なまざるの活動史(日本を知る)」(2001年、大巧社)、「地震の日本史—大地は何を語るのか」(2007年、中公新書)、「秀吉を襲った大地震—地震考古学で戦国史を読む」(2010年、平凡社新書)などの著書を記している。また、新聞紙上の連載、数々の講演会などを通して、社会と第四紀学をつなぐ啓発活動を行い、第四紀学の普及と発展に大いに貢献してきた。

以上のように、寒川会員の業績は高く評価されるものであり、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断する。

#### <受賞者の言葉>

日本第四紀学会学術賞を授与くださり、大変光栄に思っております。

私は学生時代から活断層の研究を行っていましたが、1986年春に、偶然、考古学の遺跡発掘現場で液状化現象の痕跡に出会い、出土した遺構・遺物との関係から地震の年代を絞り込むことができました。これに眼を開かれ、各地の遺跡で地震痕跡を探すことになり、様々な成果を得ることができました。

発掘現場での調査は、その遺跡を担当する考古学者との共同作業でした。お互いに専門の知識を教え合いながら、地震の年代や地盤災害の詳細、さらに、当時の人々の被った被害などを考えました。その過程で、多くの方々に地震痕跡に関する調査法や、研究の意義を理解して頂くことができましたと思います。

境界領域とはいえ、私自身、もともと歴史や文学が好きだったので、自然体で研究を続けることができました。その間、多くの皆さまから、ご助力・ご支援を頂きましたことを、心よりお礼申し上げます。

3月11日には、東日本大震災という痛ましい出来事が起こりました。『日本三代実録』に書かれた貞観地震が注目されていますが、我が国には過去千数百年にわたる文字記録があります。さらに、人々が生活した痕跡が全国各地の地下に埋蔵されています。私たちの祖先たちが、この地震列島に住み続けた歴史そのものが、私たちの財産であり、



寒川 旭氏

将来への教訓に満ちているという認識を深めています。

一方では、「阪神・淡路大震災」で、地震の翌日から被災地に入り、「関西には地震がない」という

神話の存在に驚かされた記憶が蘇ります。「研究の成果を一般市民に伝えることの重要性和難しさ」。残りの人生では、このテーマを頭に置いて、自分なりに地道に努力したいと思います。

## ◆論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

(論文賞受賞者選考委員会委員長：宮内崇裕、幹事会)

### (1) 選考経過

本年度の論文賞・奨励賞の推薦は1月31日をもって締め切れ、論文賞に2件、奨励賞に1件の推薦があった。論文賞受賞者選考委員会(宮内崇裕委員長、河村善也、堤隆、中里裕臣、米林伸各委員)にて検討された。論文賞については、推薦2件を含め「第四紀研究」第48・49巻に掲載の論文について独創性・発展性・総合性などについて評価を行い、1件を論文賞候補とした。奨励賞については、推薦1件を含め「第四紀研究」第48・49巻に掲載の論文のうち、筆頭著者の年齢が奨励賞受賞に該当する論文について独創性・発展性・総合性などを評価し、すぐれた研究者を各委員から推薦し、審議の結果、1名を奨励賞候補者とした。

5月24日の第3回評議員会において、論文賞受賞者選考委員会より、選考に関する経過と最終候補論文・候補者及び推薦理由等の説明が行われた。評議員会での質疑応答の後、論文賞は中沢祐一会員・出穂雅実会員・赤井文人氏による第四紀研究48巻、2号掲載論文に、また奨励賞受賞者として田村亨会員に決定された。

### (2) 論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文 論文賞

●中沢祐一・出穂雅実・赤井文人「Between the two hearths: Site formation processes and spatial organization at the Upper Paleolithic open-air site of Kamihoronai-Moi, Hokkaido (Japan)」(第48巻2号、85-96頁；二つの炉址：北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡における遺跡形成過程と空間組織)

本論文は、先史狩猟採集民の行動的多様性を理解するために、北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡(最終氷期末期)から出土した上部旧石器時代石器群と二つの炉址について、Geo-archaeological(考古地質学的)な分析を施し、それらがパリンプセプト(空間重複的に出現した考古学的記録)である確率論的検証を行った事例研究である。パリンプセプトとは、Geoarchaeologyの視点を基礎においた場合(すなわち、文化的形成プロセスと非文化的形成プロセスを等価の変数とした場合)に行動エピソードが空間的重複によって生じる可能性のある考古学的記録のことである。論文賞に該当する諸点を以下に述べる。

考古遺跡の形成過程に関する理論的研究では、痕跡や居住パターンが単に当時の人間行動のみによってそこに残されているという単純な考え方が主流であったが、1970年代以降北米などを中心に地質学的方法を積極的に用いて遺跡での活動や居住の多様性を理解するGeoarchaeologyの有効

性が示された。本論文ではまず Geoarchaeologicalな検討によって、狩猟採集集団は2つの炉を同時期に利用したが居住強度(居住期間と居住頻度)は低く占拠地点の利用は短期間であったこと、石器石材の消費形態に現れた差異は炉ごとの分業によることが示唆された。次にこれらがパリンプセプトとして生じる可能性を、占拠地点への居住強度・居住集団の規模・堆積率を変数とする形式モデルによって確率論的に推定した結果、上幌内モイ遺跡がパリンプセプトである可能性は中程度という評価を与えた。このように Geoarchaeologyの手法を具体的に採用し分析を行った遺跡の時空間的立地評価法は日本の旧石器遺跡においては初めての試みであり、今後の旧石器考古学における重要な指針を提示した点で高く評価される。本論文で採用された手法は、旧石器狩猟採集民の居住強度や行動の多様性を推定する上で汎用性があり、他の遺跡への応用研究と旧石器遺跡の総合研究への発展が期待される。

以上により、本論文を日本第四紀学会論文賞にふさわしいと判断した。

### <受賞者の言葉>



中沢祐一氏



出穂雅実氏



赤井文人氏

この度は日本第四紀学会論文賞を頂きありがとうございます。ご審査をいただいた先生方、シンポジウム『考古遺跡から何がわかるか?』にて発表する機会を下さった東京大学の佐藤宏之先生に御礼申し上げます。本論文では旧石器人が居住地でどのように活動を組織してきたのかを、炉を巡る石器の三次元分布の分析から論じました。後氷期の寒冷環境を経て改変された旧石器遺跡から、いかにして居住者たちの組織化された活動を抽出し論証するか、という方法論上の難題に取り組みました。資料は北海道勇払郡厚真町に位置する上幌内モイ遺跡です。この遺跡はダム建設に伴う水没地区にあり、2004年～2005年にかけて緊急発掘され、2006年に調査報告書が刊行されました。私たちは発掘調査段階から厚真町の担当の方々と共に協力し、調査課題の設定と発掘後の整理・データ化・分析を、発掘調査者と執筆者の間で分担・共有することによって議論を深めて参りました。比較的短期間で成果を得ることができたのは、ひとえに調査を担当された厚真町教育委員会の乾哲也、奈良智法、小野哲也(現・標津町教育委員会)を

中心とする皆様のご尽力とご厚意のおかげです。現在も同じ水系に位置する周辺の遺跡を調査しており、残された課題を継続的に追究していきたいと思っております。日本国内では年間6千件を下らない遺跡発掘があり、発掘調査件数と調査者の多さ、記録保存の精度の高さは世界でも類をみませんが、遺跡の内容と評価が国際学界で認知されることは非常に限られています。ひとたび調査後に出版される報告書の作成が終われば、得られた資料やデータは一部の「幸運な」遺跡を除いて再検討されることが少ないのが実情です。取捨選択される遺跡の中から、先史時代の狩猟採集社会全体の魅力を広げることのできる意味のあるデータをどれだけ提示できるかが、これからの私たちに問われていると思います。

## 奨励賞

### ●田村 亨

本論文は、海岸砂丘の形成過程を解明するために、物理探査手法（地中レーダ法）を適用することによって鳥取砂丘全体の内部構造を連続的に可視化し、層序学的新解釈を加えて冬季の卓越風による砂丘の移動と堆積過程を明らかにしたものである。奨励賞に該当する諸点を以下に述べる。日本列島、とくに日本海側に発達する大型の海岸砂丘は、活動期の砂丘砂層と非活動期（固定期）のクロスナ層の繰り返しによって作られ、それらは気候と海面の変動に影響されると考えられてきたが必ずしも見解の一致を見なかった。それは露頭やボーリング地点が限られ、層序学的情報と年代試料の採取に制約があったからである。本論文は、これらの問題を解決するために、代表的な鳥取砂丘を対象として、まず地中レーダを用いて砂丘堆積物の高分解能層序断面の可視化に成功した。とくに、往復走時から実深度への変換を慎重に行い、堆積ユニット発達過程の定量的議論を可能にした。位置情報についてはRTK-GPS測量によって求め、高精度の地形断面を描いた。これら一連の技術導入によって得たレーダ断面において、砂丘堆積物の内部構造（フォーセット層理、海浜堆積物の層理のほか、再活動面、侵食面、ユニット境界、古砂丘を覆うローム層、地下水面など）を読み取り、砂丘地形の相対的な堆積順序を示した。その中で、砂丘列ごとに異なる複雑な堆積構造はそれらが形成場（古地形や海岸線変化との関係）に影響された可能性を指摘し従来の見解を大きく進展させた点で高く評価される。今後、レーダ断面に示された堆積ユニットにおいて光ルミネッセンス法による地層の埋積年代を得ることで高時間分解能の発達史を編むことができること、測線を増やすこと

## ◆功労賞選考報告

幹事会は功労賞選考の内規に従い、①「第四紀学について多大な貢献のあった者」と②「本会に関係した活動に貢献のあった者」に該当する候補者の選考を行った。①の事項に関わる候補者として、あとに示す推薦理由から園山俊二氏を幹事会

で砂丘内部構造を3次元的に表示し動的な変化史を検討することが可能であることなどは、砂丘研究の将来への発展性や他地域への応用を期待させる。以上により、本論文を日本第四紀学会奨励賞にふさわしいと判断した。

対象論文：「鳥取砂丘の地中レーダ断面」（第49巻第6号、357-367頁）

### ＜受賞者の言葉＞

この度は大きな励みとなる賞をいただき、ありがとうございます。受賞のご連絡をいただいた当初は賞の意味がぼんやりとしか分かりませんでした。先日初めて第四紀学会の大会に参加し、優秀な若手の皆様にお会いするなか、自分がとり立ててこの賞をいただくことのありがたさを実感しました。



田村 亨氏

今回取り上げていただいた論文は、日本列島の海岸砂丘の研究を刷新する構想を紹介するために執筆しました。日本の沖積平野の多くには、日本海側を中心に、完新世～後期更新世の海岸砂丘が発達しています。こうした砂丘の発達は、海面変動、気候変動、土砂供給量、森林伐採、あるいはそれらの相互作用により影響を受けるため、発達史の解読が、第四紀後半の新たな古環境指標の開拓につながると考え、2008年から研究にとりかかっております。

日本の海岸砂丘の発達史は、1960～70年代に多くの研究者により研究され、包括的な理解が示されました。しかしその後、断片的な砂丘砂層の露頭観察や、土器、砂丘砂層に挟まれるクロスナ層による編年に頼る旧来研究手法の限界から、砂丘研究には大きな進展が見られておりません。そこで、本論文で公表したように、地中レーダから砂丘堆積物の内部構造を可視化することを足がかりに、ボーリングとルミネッセンス年代測定を適用して、3次元的な砂丘発達過程の復元をまずは鳥取砂丘で試みることにしました。本論文の続編として、小氷期の冬季モンスーンの十年スケールでの変動と砂丘活動との関係、および後期更新世の海面変動と砂丘活動との関係、についての2編の論文が公表されておりますので、そちらにも注目いただけますと幸いです。

最後になりましたが、鳥取大学の小玉芳敬先生を初めとする共著者と研究協力者の皆様、研究の構想段階で激励くださいました日本大学の遠藤邦彦先生、論文査読者、編集委員会の皆様、本研究の進展と論文出版にご尽力いただき、ありがとうございました。

### （幹事会）

は推薦することを決定した。②の事項に関わる候補者の選考に関して、幹事会は、2010年までの学会における評議員・幹事・編集委員・各種委員の年数を集計したポイントを参考に、70歳以上の会員の中から学会活動に貢献された方を対象とし

て、4月2日の第3回幹事会で功労賞受賞候補者を決定した。

5月24日の第3回評議員会において、幹事会より功労賞の受賞候補者の答申が行われ、質疑応答の後、11名を功労賞受賞者として決定した。

第四紀学について多大な貢献のあった者：  
園山俊二氏（故人）

1974年より小学館の学年誌に掲載が始まったマンガ「はじめ人間ギャートルズ」は、氷河時代の人間を主人公としており、一般の方が「氷河時代」に親近感を持つきっかけになった。作者の園山俊二氏には、1990年ごろ、日本第四紀学会から「ギャートルズ」の絵を入会案内申し込み書用に依頼したところ、学会の主旨をご理解いただき、快くお引き受けいただいた。この絵には、マンモス、オオツノジカ、旧石器人、火山といった第四紀を象徴するコンテンツが描かれており、学会のHP (<http://www.soc.nii.ac.jp/qr/intro/daiyonki.html>) で見るができる。また、園山俊二氏に

は学会活動のために自由に「ギャートルズ」の絵を使用することを許可していただいた。このように、園山俊二氏は長年にわたり第四紀学の普及・啓発と学会の活動に貢献するところが大きいことから、功労賞受賞候補者に推薦する。なお、園山俊二氏は1993年に57歳で他界されたが、奥様、ご子息によってその意志が受け継がれ、「そのやま企画」プロダクションが現在も活動している。

本会に関係した活動に貢献のあった者

会員（カッコ内は2010年での満年齢）：10名

成瀬 洋 会員（86） 北川芳男 会員（82）

倉林三郎 会員（82） 堀口万吉 会員（81）

石田志朗 会員（80） 松田時彦 会員（79）

小池一之 会員（75） 永塚鎮男 会員（75）

小疇 尚 会員（75） 菊地隆男 会員（72）

評議員・幹事・編集委員・各種委員などを長年務め、学会活動への寄与が大きいことから、功労賞にふさわしいと判断した。

## ◆日本第四紀学会 2011 年大会 シンポジウム報告

2011年大会では8月28日（日）に公開シンポジウム「環太平洋の環境文明史」が開催されました。このシンポジウムは、同じタイトルで平成21年度から平成25年度の計画で実施されている文部科学省科学研究費新学術領域研究をもとにプログラムを構成しました。この学際研究は年縞堆積物から復元した自然史と通時的考古学研究による文明盛衰の歴史を比較し、環境変動を視点とした文明史を構築すること目的としたものであり、多元性と学際性を特色としている本学会の公開シンポジウムとして適していると考えました。手前味噌な説明ですが、主催者の意図にご理解をいただければ幸いです。適所があれば適材が必要です。本学会会員2名、さらに会員以外から2名の方に講師をお願いしました。演題は以下のとおりです：「マヤ文明と環境変動」（青山和夫、茨城大）、「地球環境変動と考古学研究」（マーク・ハドソン、西九州大）、「琉球列島先史・原史文化と環境変動」（高宮

広土、札幌大、会員）、「環境考古学の未来」（安田喜憲、日文研、会員）。講演に先立って、鳴門教育大学学長・田中雄三先生に、普及講演までを含めたウェルカムスピーチを、引き続いて遠藤邦彦会長にシンポジウムによせた挨拶をいただきました。参加者数は学会員・一般の参加者を含めて約100名でした。当日実施したアンケート調査では回収率が約30%と低かったものの、有効回答29名のうち28名（96.6%）の方から「とても良かった」、「良かった」との回答をいただきました。

最後になりましたが、シンポジウムにご参加いただいた皆様、講師の皆様、そして本学社会連携課と「環太平洋の環境文明史」からのサポートスタッフのおかげを持ちまして公開シンポジウムは成功裡に終了することができました。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。当日の講演に関連した内容を「第四紀研究」特集号で公表する予定です。（鳴門教育大学・米延仁志）

## ◆日本第四紀学会 2011 年大会 普及講演会報告

「徳島で考える地震津波と防災—東日本大震災からの新たな教訓—」と題して普及講演会が行われ、4人の演者に発表をお願いしました。遠藤邦彦会長からのご挨拶、西山からの趣旨説明の後、原口強先生（大阪市立大学）から、「3.11 東北地方太平洋沖地震による津波遡上域—下北半島尻屋崎から千葉県までの現地調査—」と題して、2ヶ月間かけ、8,000kmを走破した現地調査の貴重な報告をいただきました。次に、岡村 眞先生（高知大学）から、「津波堆積物に記録された南海・東南海・東海三連動巨大地震の繰り返し」と題して、南海トラフで発生する巨大津波の発生パターンについて報告されました。約2,000年前には、1707年宝永地震津波を上回る巨大津波が四国を襲っていたことが報告され、新聞でも報道されました。三番

目に、中野 晋先生（徳島大学）から、「徳島県の津波対策の現状と課題」と題して、徳島県の津波対策と改善点、徳島大学の防災に関わる教育プログラムなどに関して報告されました。最後に、植木岳雪さん（産業技術総合研究所）から、「学校教育における防災教育：「生きる力」の育成のために」と題して、安全教育に偏りがちだった防災教育を改め、各教科や特別活動などを横断する総合的な防災教育の構築が重要と報告されました。

2011年大会が開催された徳島県では、南海地震による被害が予想されていますが、東日本大震災を踏まえ、被害想定は大きく見直されることとなります。予測の改訂には第四紀学の最新の知見が必要ですし、評価結果を住民の防災に活かすための方策も必要となります。日本第四紀学会のさ



らなる貢献が期待されます。

当日は、120名ほどの皆様にお集まりいただき、普及講演会は成功裏に終了いたしました。ご講演

いただいた演者の皆様、ご参加いただいた皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

(徳島大学 西山賢一)

## ◆日本第四紀学会 2011 年大会アウトリーチ巡検報告

日本第四紀学会 2011 年大会アウトリーチ巡検は「百万年前の東四国を探る」というテーマで、8月29日に開催された。案内者は西山賢一（徳島大学）、中尾賢一（徳島県立博物館）、竹村恵二（京都大学）、植木岳雪（産総研）の4名、参加者は合計で56名（うち会員は約12名）であり、Stop1～Stop4では讃岐山脈の南の中央構造線と更新統土柱層、Stop5では讃岐山脈の北に分布する長尾断層と三豊層群を見学した。

Stop1では父尾断層の断層地形を遠望し、断層崖に沿って徳島自動車道が建設されていることを確認した。1991年のトレンチ調査から父尾断層は弥生時代と16世紀末に活動した推定されることの説明があった。アナグリフ写真と赤青メガネを使った地形の解説があり、好評であった。

Stop2では、土柱層と井手口火山灰層を観察した。井手口火山灰は誓願寺柵テフラに対比されていること、本地点の礫層は花崗岩礫を含むことから、2km東にある日開谷川が運搬した礫層であり、約60万年間で2km右横ずれ運動で移動したことの説明を受けた。参加者は熱心に花崗岩礫を探していた。

Stop3では、約20年前に切り取った崖の様子を観察した後、国指定天然記念物「阿波の土柱」を遠望しながら成因や最近の土柱の崩壊や侵食および土柱火山灰の説明を受けた。その後、参加者は近くに行って土柱を構成する礫層や土柱火山灰層を観察した。

昼には美馬市脇町の「うだつの町並み」を見学しながら昼食をとった。



土柱に近づく参加者たち (Stop3)

Stop4では土柱層の上に低角度断層で乗り上げる和泉層群の破碎部と本流性の土柱層を観察した。この地点の土柱層に含まれる高変成度変成岩礫と愛媛県関川の河床礫が酷似していることについての考察をした。参加者は熱心にガーネットを含んだ角閃岩を採集した。

Stop5では香東川河床に降りて三豊層群の泥・砂・泥炭層を観察し、泥炭層から球果や材化石を発見した。対岸の露頭では長尾断層を観察した。

アウトリーチ巡検ということで地元の小中学生や教員などが多かったことから、その方々に合わせた巡検であり、案内者からはわかりやすく説明いただいた。末筆ながら、案内者および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(徳島県那賀郡相生中学校 森江孝志)

## ◆緊急シンポジウム「巨大地震を探る－第四紀学からのアプローチ」に参加して

千葉 崇 (東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程)

2011年3月11日に起こった東北地方太平洋沖地震からこれまで何がわかり、これからどう向き合っていけばいいのか。7月10日に行われた緊急シンポジウム「巨大地震を探る－第四紀学からのアプローチ」は、新しい事実や知見ばかりでなく、第四紀学に携わる研究者にとっての社会への関わり方についても考える場になった。シンポジウムは東大理学部の小柴ホールで行われ、一般の参加者も含め135名の参加があり、活発な議論が展開された。

招待講演である島崎邦彦名誉教授の講演では、東北地方太平洋沖地震の実態と発生メカニズム、そして大きな被害をもたらした津波地震についての現状の理解について説明して頂いた。佐竹健治教授には津波の波形から、この地震が東北地方の太平洋側で広域に地殻変動を起こしたプレート間地震である貞観型の地震と、巨大な津波を引き起こした海溝沿いの地震である明治三陸型の地震が同時に起こったものであることを説明して頂いた。

また、第四紀学会員からの講演では、澤井祐紀博士に主に貞観地震による地殻変動と津波について微化石から詳細に読み解く方法を説明して頂いた。鈴木毅彦教授には、常磐海岸において地形・地層に数万年スケールで記録された地殻変動について今回の地震との関わりを説明して頂いた。遠田晋司教授には今回の地震に伴う広域な静的応力変化により、内陸の活断層にどのように影響しているのかという今後の地震発生の予測に繋がる内容を説明して頂いた。そして吾妻 崇研究員には、日本内陸の活断層についての活動度や現状における緊迫性について説明して頂いた。

また、本シンポジウムから、長い周期の巨大地震ほどその地震についての対策の費用対効果を検討することが難しいと思われた。例えば千年に一度起こる地震・津波について、堤防などの手段を投じたとしても、実際に将来有効かどうかはわからず、維持費だけがかさみむだけの可能性もあり得る。しかし、それよりも短い周期かつ規模の小

さい地震・津波対策としては必要である。今後、未来に地震の危険性を伝えていくためには、建築物による対策だけでなく、教育や啓蒙活動を定期的に行って、知識と知恵を分かりやすく伝えていく活動も大切だと感じた。

過去の地震をもれなく探すことが、一般から地球科学研究者に求められている成果であると思われるが、地層・地形に残る古地震の情報は常に不

完全だ。それを研究者は読み解き、古地震像を復元することでより確実性の高い情報に変換する。それによって明らかになる定量的な成果に基づき、未来を予測するという手法が大切だ。人の一生よりも長い時間に跨る地球上の現象を評価するためには、やはり地質学・地形学の知見と時間スケールでの考え方が有効であり、地質学的に最近の現象を扱う第四紀学の視点が重要であると感じた。

## ◆ 2010 年度研究委員会活動報告

■ “地球温暖化問題” を検討する研究委員会 (代表: 陶野郁雄)

地盤工学会「地球温暖化に及ぼす影響に関する研究委員会」及び環境省「地球温暖化研究プロジェクト」との3機関合同シンポジウムを企画し、2011年3月18日に日本大学100周年記念国際会議場において開催することとした。しかし、3月11日に東北地方太平洋沖地震と命名されたM=9.0の巨大地震が発生したため、急遽延期した。改めて、6月9日に日大文理学部図書館においてシンポジウムを開催した。充分周知できなかったにも拘わらず約50名の参加があり(委員を除く)、活発な質疑応答がなされた。シンポジウムが終わった後、場所を変えて委員会を開催した。そこでは、主に東日本大震災に関係する問題を抽出し、どのように対応していくべきかについて約2時間討議した。

また、7月5日に神戸商工会議所で開催された地盤工学会主催のディスカッションセッション「地球温暖化に及ぼす影響と対策」に協力し、遠藤会長と共に私も座長を務めた。後半には立って聞かれている人も出るほどの盛況であった。4年後に国際会議開催が決まったことでもあり、代表者を変えて研究委員会を存続することを熱望する。

■ 古気候変動研究委員会 (代表: 公文富士夫)

2010年度には研究委員会としての組織だった活動はできなかったが、古気候分野の会員の努力によって以下の3つの国際的な研究集会・ワークショップが国内で開催された。また、Japan-PAGESのネットワークを通じてこれらの活動が周知された。

・ PAGES1st Asian 2K Workshop in Japan: 2010年8月26～27日 名古屋大学  
(過去2千年間の詳細な気候変動をアジア地域で解明することを目指したWS。)

・ PMIP3 Kyoto Workshop: 2010年12月5～10日 京都ガーデンパレスホテル  
(気候モデルを用いて過去の復元や将来予測を行う研究者集団の国際的なWS。)

・ 2nd Annual Symposium of IGCP-581-Evolution of Asian River Systems: Tectonics and Climates: 2011年6月11～14日 北海道大学  
(気候変動や地殻変動に回答した河川発達についての研究集会。)

■ 東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学 (代表: 小野 昭)

このプロジェクトの最後の年度である。成果の取りまとめに力点を置いた。今までの取り組みの主要部分を、1) Quaternary International 誌に7本の論文として編集をおこない終了した。2) また、考古学関係で世界的にサーキュレーションのよい British Archaeological Reports (B.A.R.) International Series に本プロジェクト関連の論文を10本組織し、編集を終了した。日本語による成果の論集刊行の仕事がまだ完了していないが、本プロジェクトは2011年の本大会時をもって終了する。

■ テフラ・火山研究委員会 (代表: 長岡信治)

テフラ・火山研究委員会は、INQUA International Focus Group on Tephrochronology and Volcanology (INTAV) (INQUA 第17回ケアンズ大会以降、旧 Sub-Commission on Tephrochronology and Volcanism (SCOTAV) を引き継いだ組織) の対応窓口となっている。テフラ・火山研究委員会の2010年度の活動としては、同年度の東京大学大気海洋研究所の共同利用研究集会を申請し、2011年1月11日～12日にシンポジウム「日本列島周辺域に分布するテフラのデータベース整備にむけて」(世話人: 長岡信治・鈴木毅彦・青木かおり) を東京大学柏キャンパスにて開催した(参加者68名)。11日は「最近のテフラ研究の動向」として7人から話題提供があった。12日は午前中に3名の研究者から JAMSTEC で運用されている海底コアや岩石データベース、産総研の活断層データベースについて、成立までの経緯や運用・メンテナンスに関して話題提供がなされ、午後は4名の研究者からはそれぞれ火山噴火や火山防災、テフラに関するデータベースについて紹介があった。さらに、坂本竜彦博士(JAMSTEC)より、JAMSTECでのテフラデータベースの整備の可能性とそのロードマップについての提案があり、参加者による公的なテフラのデジタルデータベース構築の可能性と解決すべき問題点について議論した。本シンポジウムの内容は話題提供者に原稿の執筆を依頼しており、月刊地球の特集号として2011年度中に出版される予定である。(文責: 青木かおり・鈴木毅彦)

■ 古地震・ネオテクトニクス研究委員会 (代表: 吾妻 崇)

INQUA の Focus Group on Paleoseismicity and active tectonics の国内対応組織として、同 Group の活動に関連して開催されたワークショップ等の案内を、メーリングリストを通じて会員に知らせ

た。2011年東北地方太平洋沖地震発生後には、この地震による地殻変動や被害に関する情報を収集するとともに、「第四紀研究」に掲載された津波関連の論文を学会ホームページで紹介した。また、2011年7月10日(日)に東京大学小柴ホールを

会場として緊急シンポジウム「巨大地震を探る—第四紀学からのアプローチ」を開催した(参加者135名)。このシンポジウムでは、地震・津波研究の専門家による招待講演2件と会員による講演5件および総合討論を行った。

### ◆ 研究委員会の募集のお知らせ

研究委員会は、会則第15条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループです(下記内規参照)。また、国際第四紀学連合(INQUA)のCommission、International Focus Group及びProjectなどに対応する国内組織としての役割を果たすことを目的としています。現在、INQUAには下記の5つのCommissionが設置されています。

Coastal and marine processes (CMP)

Palaeoclimate (PALCOMM)

Human and Biosphere (HaB)

Stratigraphy and Chronology (SACCOM)

Terrestrial Processes, Deposits and History (TERPRO)

Commissionの活動内容の詳細および2011年まで活動していたInternational Focus Group及びProjectについては、INQUAのホームページ<http://www.inqua.org/>をご覧ください。

研究委員会の設置期間は、INQUA大会終了後の評議員会から次のINQUA大会終了後の評議員会までの4年間です。設置された各委員会は、会合開催など委員会活動を支援するための予算(2011年度は総額25万円)を毎年申請することができます。なお、次期に設置される研究委員会には、2015年に開催されるINQUA第19回名古屋大会においてSessionや巡検企画などが提案されることが望まれます。

研究委員会の設置を希望される場合は、下記内規を参考に、委員会名、提案者名(5名以上の正会員)、代表者名、連絡先、活動目的、4年間の活動計画概要、予想される参加者数、2011年度計画(予算案含む)などを明記の上、2011年12月31日までに電子メールで担当庶務幹事水野(k4-mizuno(at)aist.go.jp)宛にお申し込み下さい。提案頂いた委員会の設置については、次回の評議員会(2012年2月頃に開催予定)で審議されることとなります。現在の研究委員会の活動は次回評議員会までとなりますので、活動の継続を希望する場合にも新規に申請して下さい。

#### 研究委員会内規

1. 研究委員会は、会則第18条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。当分の間、国際第四紀学連合(INQUA)の研究委員会(Commission)における諸活動に対応する国内委員会としての役割を果たすほか、IPCC、IGBPなどの関連する国際組織への対応を目的に含めることとする。
2. 研究委員会の設置は、少なくとも5人以上の正会員からの申し出に基づいて、幹事会から評議員会に提案され、評議員会の承認を得るものとする。
3. 研究委員会の発足を希望する会員は、委員会名、代表者、連絡先、目的、活動予定期間、活動計画、支出計画、予想される参加者数などを文書で幹事会に申し出るものとする。
4. 研究委員会の目的を推進するために、学会は財政的に可能な範囲内で、研究委員会の活動費を4年を限度として交付する。
5. 研究委員会の任期はINQUA後の最初の評議員会から次のINQUA後の評議員会までの4年間とする。
6. 研究委員会は、集会の開催通知や活動記録などを「第四紀通信」に掲載することとし、集会は一般会員にも公開することを原則とする。
7. 研究委員会の代表者は毎年年度末までに活動報告、会計報告および次年度の活動の希望の有無を幹事会を経由して評議員会に文書として提出しなければならない。
8. 研究委員会の代表者は対応するINQUAのCommission等に活動成果などを報告するとともに、その内容をINQUA終了後に幹事会を経由して評議員会に文書として提出する。
9. 研究委員会の運営は代表者に一任するが、この内規で処理できない点については、幹事会と協議するものとする。

## ◆第 19 回 INQUA 大会日本招致準備委員会活動報告

(委員長：齋藤文紀)

- ・2010年8月21日(土) 12:40～13:40 第19回 INQUA 招致準備委員会第5回会合(東京学芸大学)
  - 1) 2010年7月1日 INQUA 事務局が日本の招致意思表示を受理した。
  - 2) 総合テーマについて審議。継続審議とした。
  - 3) 開催地と会期(名古屋国際会議場、2015年7月27日～8月2日)を了承。
  - 4) 組織名を「第19回 INQUA 大会日本招致委員会」に変更することを了承。
- ・2011年1月17日(月) 12:00～15:00 第19回 INQUA 大会日本招致委員会幹事会(日本学術会議)
  - 1) 総合テーマ、個別テーマを引き続き検討した。
  - 2) 2011年5月1日締め切りの INQUA 執行部むけ提案書に必要な事項につき検討した。特に、大会組織委員会・実行委員会委員候補者および巡検案内者候補者を選考し、依頼をすすめることとした。
- ・2011年4月9日(土) 13:00～17:00 第19回 INQUA 大会日本招致委員会幹事会(日本大学)
  - 1) INQUA 執行部むけ提案書の内容について検討した。
- ・2011年4月24日(日) 9:30～12:00 第19回 INQUA 大会日本招致委員会第6回会合(首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス)
  - 1) INQUA 執行部に提出する提案書の内容と発送までのスケジュールを確認した。
  - 2) 事前に各国代表に送付し、ベルン大会会場で配布するための資料に追加あるいは削除すべき事項について検討し、それぞれの作業の担当者を決めた。
- ・2011年4月26日 INQUA 執行部むけ提案書を

- 発送し、4月28日受理の通知を受けた。
- ・2011年6月26日(火) 第19回 INQUA 大会日本招致委員会幹事会(産業技術総合研究所)
  - 1) ベルン大会会場で配布する提案書(改訂版)のとりまとめと印刷の準備を行った。
- ・2011年7月5日 INQUA メンバー各国の代表に日本招致の実現を訴える文書を送付し、電子版の提案書(改訂版)のダウンロードを案内した。
- ・2011年7月21日から27日まで、スイス・ベルンで開催された第18回 INQUA 大会において以下の活動を行った。
  - 1) 提案書(32 p.)を日本第四紀学会の経費により1000部印刷し、850部をベルン大会会場で配布した。
  - 2) 展示ブースの提供を組織委員会より受け、提案書及びパンフレット(日本政府観光局・名古屋コンベンションセンター)の配布、巡検・会場・観光案内のポスター掲示、日本の第四紀や自然、観光プロモーションビデオ・スライドショーの上映などの招致活動を実施した。
  - 3) 日本からの大会参加者を把握し、招致活動への協力を依頼した。
- ・2011年7月23日の国際評議員会で齋藤文紀日本代表・招致委員会委員長が日本の招致提案についての説明を行った。7月26日の国際評議員会で投票の結果、2015年第19回大会開催地に日本が選ばれ、7月27日の総会に提案することが決定された。
- ・7月27日の総会で賛成多数により2015年第19回大会の日本開催が決定された。これを受けて、齋藤文紀委員長が総会で名古屋での開催について説明をして多数の参加を要請した。

## ◆地球惑星科学委員会 INQUA 分科会 (第21期・第6回) 議事要旨

2011年8月16日(火) 10:00～12:30  
 出席：田村俊和・奥村晃史・齋藤文紀・鈴木毅彦  
 オブザーバ：INQUA 国内委員会 町田 洋・太田 陽子  
 INQUA 大会日本招致委員会 遠藤邦彦・吾妻 崇  
 欠席：碓井照子・渡邊眞紀子・三上岳彦  
 議題

## 1. 前回議事録の確認

## 2. 2011年第18回 INQUA 大会報告

齋藤が大会参加者・参加国状況、大会構成、日本人の活動状況、本承知活動、国際評議員会報告、国際評議員会での日本招致決定などに関する報告した。

奥村国際評議員会の以下の事項について補足した。会計監査：projectの報告が一部杜撰、Quaternary Internationalの刊行・運営、会則(投票権)、第四紀の定義問題の状況、今後 General Assemblyで招致提案国演説を行う、各国代表間の情報交換の場がない、Focus Groupの情報が外から見えにくい、fundの集中化問題。日本国内と Commission 対応が必要。

## 3. 日本招致に向けた今後の運営

- 1) これまでの参加800人の見積もりを、1000～1200人に修正する必要がある。
- 2) 学術会議との共同主催国際会議開催までの流れを確認した。
- 3) 寄附金について。JNTOの交付金システムを活用する。
- 4) 招致委員会を廃止して国際第四紀学連合第19回大会組織委員会を設置する。INQUA 分科会と日本第四紀学会によるが共同で組織すること、および、組織委員会幹事9名(齋藤・遠藤・奥村・吾妻・小野・横山・鈴木・中村・渡邊)で発足することを承認した。同じ内容を第四紀学会2011年大会評議員会に提案する。
- 5) 学術会議地球惑星分科会に対し INQUA 開催の協力要請
- 6) 資金確保に関する情報収集

## 4. その他

第21期まとめ：第四紀問題、教科書などに反映された。INQUA 対応、招致成功。

第22期今後：INQUA 準備、それに向けた日本の第四紀研究。

## ◆第 21 期日本学術会議 地球惑星科学委員会 INQUA 分科会報告

(分科会長：奥村晃史)

・2010年8月21日(土) 12:40～14:20 第21期・第4回分科会開催(東京学芸大学)

- 1) 第19回 INQUA 大会日本招致について、テーマの検討、開催地と会期(名古屋国際会議場、2015年7月27日～8月2日)を了承、組織名を「第19回 INQUA 大会日本招致委員会」に変更。
- 2) 2011年ベルン大会に向け、名誉会員：太田陽子、副会長：奥村晃史の推薦を承認。
- 3) INQUA 授賞推薦：Sir Nicholas Shackleton Medal に澤井祐紀を推薦。

・2010年12月27日(土) 10:00～11:30 第21期・第5回分科会開催(日本学術会議)

- 1) 2011年ベルン大会に向け、名誉会員：太田陽子、副会長：奥村晃史の海外推薦国を検討。
- 2) INQUA 執行部に向け、出資金・投票制度の再検討を提案することを検討。
- 3) 2011年度日本学術会議派遣代表候補、(正) 齋藤文紀、(副) 鈴木毅彦・横山祐典の推薦を決定。派遣代表は原則一人1回であるが、今回に限り、第19回 INQUA 大会日本招致委員会の齋藤文紀委員長を前回の2007年 Cairns 大会に続き正代表として推薦することとした。これは、日本招致の実現を重視したためである。
- 4) 日本学術会議第22期会員・連携会員選出に

対する取り組みについて検討した。

・日本学術会議・INQUA 関連の動き

- 1) 澤井祐紀会員の2010年度 Sir Nicholas Shackleton Medal 受賞が決定し、2011年第18回 INQUA 大会(Bern)において受賞講演が行われた。
  - 2) 2011年2月上旬に、連携会員が次期会員・連携会員の推薦を行った。
  - 3) 太田陽子会員が INQUA 名誉会員に選出された。
  - 4) 2011年第18回 INQUA 大会(Bern)への日本学術会議代表として齋藤文紀・鈴木毅彦が派遣された。
  - 5) 2011年5月1日、2015年第19回 INQUA 大会の日本招致提案が受理された。2011年7月26日に開催された INQUA 国際評議員会において日本開催が決定した。
- ・2011年8月16日(火) 10:00～12:00 第21期第6回分科会開催(日本学術会議)
- 1) 第18回 INQUA 大会について齋藤文紀代表から報告を受け、今後の対応を検討した。
  - 2) 国際第四紀学連合第19回大会組織委員会を日本第四紀学会に設置することを提案することを決議し、さらに、設置当初の幹事会メンバーの選考を行った。また、今後の運営について検討した。

## ◆教育アウトリーチ委員会の設置について

近年、研究成果の社会への還元と学校教育・生涯教育への貢献など、学会としての社会的な説明責任が求められている。

そこで、教育とアウトリーチ活動を取り扱う幹事会から独立した専門委員会を設置することが評議員会および総会で認められた。

ミッション：本委員会は、日本の将来を担う児童・生徒および市民の科学リテラシーの育成のために、(1) 地学教育・地歴教育の充実、(2) ジオパーク活動の推進と地域支援、(3) 学会間の連携、(4) 第四紀学の普及・啓発に関わるアウトリーチ活動、など学校教育と生涯教育の両面で日本第四紀学会が行うべき活動内容を検討し、実行することを目的とする。そのため、学校教育と生涯教育に造詣

の深い研究者、学校教員、博物館学芸員の会員を委員として、会員以外の外部委員を含めて組織する。

幹事会担当幹事：植木岳雪(産総研)

委員(\*は外部委員)

- 川村教一(秋田大学)
- 野瀬重人(岡山理科大学)\*
- 内記昭彦(東京都立三田高校)
- 舟越洋二(北海道鹿追町立鹿追小学校)\*
- 目代邦康(自然保護助成基金)
- 中条武司(大阪市立自然史博物館)
- 尾方隆幸(琉球大学)
- 金森晶作(はこだて未来大学)\*

## ◆渉外委員会の設置について

日本地球惑星科学連合や自然史学会連合をはじめとする国内の関連諸学会、諸団体との連携の拡大・深化が要請されている。日本第四紀学会の対外活動を一層活性化するために、渉外委員会を設置することが評議員会および総会で承認された。

委員会のミッション：日本第四紀学会渉外委員会は、渉外関連の情報の収集・整理等を行って、関連学協会対応を進めていく。日本地球惑星連合における第四紀学分野のセッションの提案や、関連学会との連携をはかる。

委員

- 竹村恵二(京都大学)
- 奥村晃史(広島大学)
- 三浦英樹(極地研究所)
- 水野清秀(産業技術総合研究所)
- 吾妻 崇(産業技術総合研究所)
- 陶野郁雄(国立環境研究所)
- 田力正好(地震予知振興会)
- 加藤茂弘(兵庫県立人と自然の博物館)
- 目代邦康(自然保護助成基金)
- 須貝俊彦(東京大学)(渉外幹事)

## ◆第四紀研究投稿規定と執筆要項の一部改訂について

投稿規定と執筆要項ともに、2012年1月1日からの実施となります。改訂の要点は、投稿時に電子ファイルをつけること、別刷りの学会負担が無くなったこと（PDFファイルが提供される）、原稿に行番号をつけることです。電子ファイルの形式等の詳細については、「第四紀通信」や学会ホームページであらためてお知らせいたします。第四紀研究への投稿を予定されている方はご注意ください。また、ご不明な点などありましたら、編集幹事または編集書記までお問い合わせください。

日本第四紀学会編集委員会  
(2011年8月1日～2013年7月31日)

編集幹事

岡崎浩子（千葉県立中央博物館）  
長橋良隆（福島大学）

編集委員

石山達也（東京大学地震研究所）  
入野智久（北海道大学）  
及川輝樹（産業技術総合研究所）  
大串健一（神戸大学）  
片岡香子（新潟大学災害・復興科学研究所）  
加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館）  
紀藤典夫（北海道教育大学函館校）  
西城 潔（宮城教育大学）  
島田和高（明治大学博物館）  
白井正明（首都大学東京）  
田村 亨（産業技術総合研究所）  
林 成多（ホシザキグリーン財団）

編集書記

綿引裕子

### ◆「投稿規定」改定（変更箇所のみ）

(現行規定)

#### 2-2. 原稿の種目

雑録：

#### 4. 投稿手続き

投稿者は封筒に「第四紀研究原稿」と明記して原稿・図・図版・表・送り状のコピー3部を、必要な署名がされた投稿原稿内容の保証書とともに、編集委員会（本規定の末尾および会誌奥付の学会事務局の住所）に送付する。

#### 6. 受付後の原稿の処理

#### 7. 校正

…… 著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

#### 8. 別刷

別刷は50部単位で希望することができる。100部以上申し込んだ場合は、表紙が必要な場合は、そのうちの50部分について学会が費用を負担する。表紙の費用は全額著者負担とする。別刷の費用については別途定める。

#### 9. 原稿の返却

掲載された原稿・図・図版・表などは返却しない。受理されなかった原稿・図・図版・表などは返却する。

付則 本規定は2007年1月1日から実施する。

(改定案)

#### 2-2. 原稿の種目

雑録 Miscellany：

#### 4. 投稿手続き

投稿者は封筒に「第四紀研究原稿」と明記して原稿・図・図版・表・送り状のコピー3部とその電子ファイルを、必要な署名がされた投稿原稿内容の保証書とともに、編集委員会（本規定の末尾および会誌奥付の学会事務局の住所）に送付する。

#### 6. 受付後の原稿の処理（以下を追加）

6-7. 投稿原稿の掲載不可は編集委員会が決める。掲載不可となった原稿・図・図版・表などは返却する。

#### 7. 校正

…… 著者校正を省略するか、次号にまわすこともある。

校正時の著者責任による図・表等の差し替えにかかる費用は全額著者負担とする。

#### 8. 別刷

別刷は50部単位で希望することができる。別刷の費用については別途定める。掲載された原稿の電子ファイル（PDFファイル）は著者（論文責任者）に提供される。

#### 9. 原稿の返却

掲載された原稿・図・図版・表などは返却しない。掲載されなかった原稿・図・図版・表などは返却する。

付則 本規定は2012年1月1日から実施する。

◆「執筆要項」の改定（変更箇所のみ）

（現行規定）

2. 表題・著者名

著者名の右肩に\*1, \*2……の記号をつけ、原稿の1ページ目の下部に脚注として所属とその所在地、論文責任者の連絡先（住所・Eメールアドレスなど）を明記する……

4. 摘要・キーワード（改ページ）

4-4. 摘要の最後には、時代・地域・対象・方法などを表す5語程度のキーワード（keywords）を本文と同じ言語でつける。

5. 本文

（追加）

13. 要旨

13-2. 表題、著者名、要旨、キーワードの順に書き、脚注に所属とその所在地を書く。言語は英語または日本語に統一する。なお、英文タイトルに用いる大文字は、……

付則 本要項は2010年1月1日から実施する。

（改定案）

2. 表題・著者名

著者名の右肩に\*1, \*2……の記号をつけ、原稿の1ページ目の下部に所属とその所在地、論文責任者の連絡先（住所・Eメールアドレスなど）を明記する……

4. 摘要・キーワード（改ページ）

4-4. 英語の摘要には、すみやかに校閲するために日本語対訳を別紙で添える。ただし、この対訳は印刷されない。

4-5. すべての種目の原稿には、時代・地域・対象・方法などを表す5語程度のキーワード（keywords）を本文と同じ言語でつける。

5. 本文

5-12. 原稿には行番号をつける。

13. 要旨・キーワード

13-2. 本文と異なる言語の表題、著者名、要旨、キーワード、そして、著者名の右肩に\*1, \*2……の記号をつけ、著者の所属とその所在地、論文責任者の連絡先（住所・Eメールアドレスなど）を書く。なお、英文タイトルに用いる大文字は、……

付則 本要項は2012年1月1日から実施する。

◆山口大学大学院理工学研究科 地球科学分野（理学部 地球圏システム科学科） 教員公募

- ・地球科学、とくに地史学（層序学・地球環境科学）分野
- ・教授または准教授 1名
- ・締切：2011年10月14日必着

詳細 <http://www.sci.yamaguchi-u.ac.jp/office/recruit.html>

◆千葉大学大学院理学研究科 地球生命圏科学専攻地球科学コース 教員公募

- ・千葉大学大学院理学研究科地球生命圏科学専攻地球科学コース（地球表層科学教育研究分野）
- ・准教授または助教 1名
- ・締切：2011年10月31日必着

詳細 <http://www-es.s.chiba-u.ac.jp/news/kobo20110823.pdf>

◆神戸大学自然科学系先端融合研究環 内海域環境教育研究センター 教員公募

- ・海洋地球科学、とくに古環境学、古海洋学
- ・講師または助教 1名
- ・締切：2011年10月28日必着

詳細 <http://www.research.kobe-u.ac.jp/rcis-kurcis/KURCIS/koubo2011.pdf>

◆2010年度第4回幹事会議事録

日時：2011年7月9日（土）10:00～17:30

場所：日本大学文理学部本館C会議室

出席：遠藤、百原、竹村、池原、高田、長橋、須貝、荻谷、吾妻

オブザーバー：奥村、出穂、岡崎、北村、兵頭

議事：

1) 各担当分野について前回幹事会以降の活動報告を行った。

2) 2011年度徳島大会におけるシンポジウム、巡検の準備状況を確認した。

3) 2010年度評議員・役員選挙の結果について報告を受けた。

4) 顕彰関係の準備状況について確認した。

5) 名簿の作成状況について確認した。

6) 編集委員会から提案された「投稿規定」および「執筆要項」の改定案について検討した。

7) 震災により会費を払えない場合への措置について検討し、次回総会に会則の一部改訂を提案することとした。

## ◆ 2011 年度第 1 回評議員会議事録

日時：2011 年 8 月 26 日（金） 18:00～20:00

場所：鳴門教育大学・講義棟 B104

出席：吾妻 崇、阿部祥人、池原 研、出穂雅実、植木岳雪、遠藤邦彦、奥村晃史、小野 昭、河村善也、公文富士夫、斎藤文紀、須貝俊彦、鈴木毅彦、竹村恵二、長橋良隆、兵頭政幸、藤原 治、松浦秀治、三浦英樹、水野清秀、百原 新、山崎晴雄、横山祐典 このほか、熊井久雄（元会長）、高田将志（幹事）が出席。

三浦英樹行事幹事の司会で、遠藤邦彦会長あいさつの後、鈴木毅彦評議員を議長に選出した。定数確認（出席 23 名、委任状 14 通）後、配布資料に基づき下記の報告・審議を行った。報告・審議事項はそれぞれ担当の幹事により説明が行われた。

### I 報告事項

1. 2010 年度活動報告（2010 年 8 月 1 日～2011 年 7 月 31 日）

1-1 庶務（庶務幹事：吾妻 崇〔庶務〕、三田村宗樹〔顕彰〕、渡邊真紀子〔法務〕）

1) 会員動向（2011 年 7 月 31 日現在）：正会員 1374 名（うち学生費会員 60 名、海外会員 12 名を含む）、名誉会員 12 名、賛助会員 10 社。逝去会員：長岡信治会員（2011 年 7 月 9 日）、吉良竜夫会員（2011 年 7 月 19 日）。

2) 総会・評議員会・幹事会の開催：2010 年度第 1 回評議員会を 2009 年 8 月 20 日に東京学芸大学で開催した（出席者 21 名、委任状 9 通。議長：海津正倫）。2010 年度総会を 2010 年 8 月 21 日に東京学芸大学において開催した（出席者 86 名、委任状 187 通。議長：山崎晴雄）。2010 年度第 2 回評議員会を 2011 年 1 月 22 日に奈良女子大学において開催した（出席者 16 名、委任状 18 通、議長：高橋啓一）。2010 年度第 3 回評議員会を 2011 年 5 月 24 日に幕張メッセ国際会議場で開催した（出席者 19 名、委任状 11 通、議長：岡崎浩子）。幹事会を 4 回開催した。

3) 2011～2012 年度評議員・役員選挙を実施した（報告事項 5）。

4) 2011 年日本第四紀学会賞および学術賞の選考を行った（報告事項 6）。

5) 2011 年日本第四紀学会論文賞および奨励賞の選考を行った（報告事項 7）。

6) 功労賞受賞者の選考を行った（報告事項 8）。

7) 理科 4 科目履修の申入れを各都道府県の教育委員会等に対して行った。

8) 名簿作成のため、会員の所属先等に関する確認調査を行い、名簿の編集を行った。

9) 財政状況改善のため、支出削減に関する検討を行った。

10) 転載許可の受付を行った。

11) 寄贈図書受付、整理を行い、倉庫管理資料の整理・処分を実施した。

8) 2012 年度地球惑星科学連合大会に提案するセッションについて検討した。

9) 互選により新幹事の役割分担を決めた。

12) 下記の学会・シンポジウム等の共催・後援を行った。共催 4 件（第 20 回環境地質学シンポジウム、2010 年 12 月 3 日（金）～4 日（土）開催；シンポジウム「関東盆地の地質・地殻構造とその形成史」2011 年 9 月 9 日（金）～9 月 11 日（日）開催予定；トピックセッション「関東平野の更新統層序とテクトニクス」2011 年 9 月 9 日（金）～9 月 11 日（日）開催予定；「第 55 回粘土科学討論会」2011 年 9 月 14 日（水）～16 日（金）開催予定）。後援 12 件（「2010 年度日本沙漠学会秋季シンポジウム」2010 年 10 月 16 日（土）開催；「中・下部更新統境界国際モードに関する国際シンポ」2011 年 1 月 15 日（土）～16 日（日）開催；「第 1 回アジア太平洋巨大地震・火山噴火リスク対策ワークショップ」2011 年 3 月 14 日（月）～15 日（火）開催<延期>；地学教育フォーラム「地球を知れば知るほど、毎日が楽しくなる！—地学を愛する人生の達人たち—」2011 年 4 月 23 日（土）開催；研究集会「ヒトが住みはじめたころの関東地方」2011 年 6 月 9 日（月）開催；シンポジウム「旧石器時代のアジアにおける現代人的行動の出現と多様性」2011 年 6 月 25 日（土）～6 月 30 日（木）開催；大阪市立自然史博物館第 42 回特別展「来て！見て！感激！大化石展」2011 年 7 月 2 日（土）～8 月 28 日（日）開催；雨滝自然科学館 10 周年企画展「生きている化石メタセコイア—三木博士が研究したメタセコイアと水草—」2011 年 7 月 16 日（土）～11 月 23 日（水）開催；「2011 国際縄文フォーラム」2011 年 10 月 29 日（土）～30 日（日）開催予定；千葉県立中央博物館秋の展示「砂のふしぎ」2011 年 10 月 1 日（土）～12 月 4 日（日）開催予定；「第 2 回日本ジオパーク全国大会洞爺湖有珠山大会」2011 年 9 月 29 日（木）～10 月 1 日（土）開催予定；「野尻湖発掘 50 周年記念式典およびシンポジウム」2011 年 10 月 1 日（土）～10 月 2 日（日）開催予定）。

1-2 行事（行事幹事：三浦英樹）

1) 日本第四紀学会 2010 年大会を東京学芸大学芸術館ホールほかにおいて、2010 年 8 月 20 日（金）～8 月 23 日（月）に開催した。8 月 20 日～21 日に一般研究発表を行い、口頭 26 件、ポスター 21 件、合計 49 件の研究発表が行われた。また、20 日夕方に評議員会、21 日に総会、21 日の午後には、2010 年学会賞・学術賞受賞者講演会（第 1 回）が行われた。22 日には、シンポジウム「自然史の教育と研究をすすめるために—さまざまな分野からの取り組み」を開催し、10 件の発表が行われた。また今回は、公開シンポジウムと合わせたポスターサロンを開催し、147 件の発表が行われた。大会参加者数は、21・22 日の一般発表および講演会では会員 135 名、非会員および不明 48 名の合計 183 名、22 日のシンポジウムでは新規受付 138 名であった。23 日には、「里山景観の違



いを探る—地生態学の視点から—と題する巡検が行われ、一般参加者 15 名であった。

2) 2010 年日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会(第 1 回)を、2010 年 8 月 21 日に東京学芸大学で開催された日本第四紀学会 2010 年大会にて実施、受賞者 2 名(多田隆治会員(学会賞受賞者)と鈴木毅彦会員(学術賞受賞者))による講演が行われた。また、2010 年日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会(第 2 回)を、2011 年 1 月 22 日に奈良女子大学で開催されたシンポジウム「近畿圏における第四紀研究の新展開に向けて—大阪層群と活断層—」と合わせて実施され、受賞者 2 名(吉川周作会員(学会賞受賞者)と岡田篤正会員(学会賞受賞者))による講演が行われた。

3) 日本第四紀学会 2011 年大会の準備を行った。大会は、鳴門教育大学において、2011 年 8 月 26 日(金)と 27 日(土)に一般研究発表・総会、28 日(土)に公開シンポジウム「環太平洋の文明史」と普及講演会「徳島で考える地震津波と防災～東日本大震災からの新たな教訓」、8 月 29 日(月)に、アウトリーチ巡検「百万年前の東四国を探る」を行う予定で準備が進められている。実行委員会は、鳴門教育大学、徳島大学、徳島県立博物館のスタッフを中心とする会員である。

4) 日本第四紀学会 2012 年大会開催地とシンポジウム内容について検討を行った。2012 年 8 月に立正大学において大会を実施することで調整中である。

1-3 編集(編集幹事:池原 研・長橋良隆)

1) 第四紀研究第 49 巻 5 号(学術賞受賞記念論文 1 編、論説 1 編、2009 年度日本第四紀学会シンポジウム特集;趣旨説明 1 編、総説 7 編、書評 3 編、96 ページ)、6 号(学術賞受賞記念論文 1 編、論説 2 編、資料 1 編、書評 1 編、53 ページ)、第 50 巻 1 号(学会賞受賞記念論文 1 編、論説 3 編、短報 1 編、書評 2 編、投稿規定など、84 ページ)、2 号(学会賞受賞記念論文 1 編、学術賞受賞記念論文 1 編、論説 1 編、書評 1 編、48 ページ)、3 号(学術賞受賞記念論文 1 編、雑録 4 編、書評 1 編、36 ページ)、4 号(論説 2 編、短報 1 編、38 ページ)で、合計 6 冊 355 ページを刊行した。ページ数は前年度とほぼ同様である。

2) 学芸大学大会特集号は第 50 巻 5 号での刊行を目指して作業中である。11 論文から構成される予定である。

3) 2009 年度日本第四紀学会シンポジウム特集を第 49 巻 5 号で刊行した。

4) 日本第四紀学会賞・学術賞受賞者に記念論文原稿の投稿を依頼し、2008 年度学術賞記念論文を第 49 巻 5 号及び 6 号で、2009 年学会賞記念論文は第 49 巻 1 号及び 2 号で、学術賞記念論文は第 49 巻 2 号及び 3 号に掲載した。2010 年学会賞・学術賞受賞者には原稿投稿の依頼済みである。

5) 編集委員会は 6 回(2010 年 9 月 25 日、12 月 4 日、2011 年 2 月 5 日、4 月 2 日、5 月 28 日、7 月 16 日)開催した。7 月 31 日現在、手持ち原稿は 10 編(論説 5 編、短報 3 編、総説 1 編、資料 1 編)。論文投稿数は、2011 年に入ってから

18 編(書評を除く)で、シンポジウム原稿を含む昨年の同時期(27 編)を大幅に下回るが、一昨年(16 編)とほぼ同じである。しかし、18 編の中に学会賞/学術賞記念論文(3 編)とニュージーランドクライストチャーチ及び東北地方太平洋沖地震の被害の報告(雑録 4 編)が含まれることを考えると投稿数は横ばいからやや減少傾向にあると言える。取り下げ・掲載不可となったのは 12 編、投稿受付から刊行までにかかった時間は、短いもので 6 か月強であった。

6) 編集状況や問題点は「編集委員会だより」を通じて、会員に知らせるように努めた。また、完成度の高い論文の作成を「編集委員会だより」にて広報した。また、学芸大学大会では編集委員会ブースを出し、編集活動の広報と投稿の促進を呼びかけた。編集委員会ブースは徳島大会においても開設の予定である。

7) J-STAGE による電子ジャーナル化を行っている。J-STAGE 側の修正作業の遅れのため、公開が遅れているが、第 50 巻 3 号までの修正作業は終了している。刊行後 1 年以内の号についての全文閲覧は、会員のみ利用可能であり、ID とパスワードにて管理される。アブストラクトと刊行後 1 年以上経過した号の閲覧については、会員外も含めて利用可能である。

8) 編集経費の削減と迅速化のため、著者校正を電子メールを通じての PDF 送付によるやり取りに変更した。この修正にともなう大きな問題は生じていない。

9) 投稿規定・執筆要項の改定作業を行った。

1-4 広報(広報幹事:荻谷愛彦)

1) 「第四紀通信(QR News Letter)」Vol.17 No.5(2010 年 10 月)、同 No.6(2010 年 12 月)、Vol.18 No.1(2011 年 2 月)、同 No.2(2011 年 4 月)、同 No.3(2011 年 6 月)および同 No.4(2011 年 8 月)を刊行した。

2) 「第四紀通信」上記各号の電子版(pdf 形式)を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。

3) 日本第四紀学会ホームページを通じて各種の広報・普及活動を行った。主なものは、「第四紀通信電子版」の掲載のほか、①本学会 2011 年大会の情報提供、②本学会主催行事(シンポジウム、講演会等)の情報提供、③「第四紀研究」の目次掲載、④ INQUA ベルン大会の情報提供、⑤各種公募・助成情報の掲載、⑥他学会等による各種イベント情報等の提供である。

4) 日本第四紀学会会員メーリングリスト(jaquaml)を通じ、大会、講演会、シンポジウム、研究集会、公募・助成等の連絡や情報提供を行った。2010 年 9 月～2011 年 7 月中旬のメーリングリスト投稿数は約 130 件で、昨年同期より約 1 割増えた。

5) 日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行った。

6) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストの管理を行った。

1-5 渉外(渉外幹事:須貝俊彦)

1) 一般社団法人日本地球惑星科学連合:2011 年

大会が2011年5月22日～27日に幕張メッセで開催され、174件のセッションに対して4,044件の発表があり（前年比358件増）、5,794名が参加した。日本第四紀学会が単独で提案母体となっている第四紀学セッションとして、従来の『第四紀』を引継ぐ『ヒト環境系の時系列ダイナミクス』が実施され、40件（口頭24件、ポスター16件）の発表がなされた。もうひとつの第四紀学セッションである『平野地質—第四紀層序と地質構造—』、日本第四紀学会が地震学会・日本地質学会・活断層学会と共同提案したセッション『活断層・古地震』をはじめ第四紀学に関連する多数のセッションが設けられた。『ヒト環境系の時系列ダイナミクス』については、昨年と同様、関連深い4つの古気候・古環境セッション『海と陸の気候—過去から現代までの変動解明へのアプローチ』『低緯度域の気候変動と間接指標の開発』『古気候・古海洋変動』『氷床・氷河コアと古環境変動』との連続開催が実現した。

2) 自然史学会連合（39学協会加盟）：2010年度総会が2010年12月4日国立科学博物館で開催された。平成22年度自然史学会連合講演会「東北の豊かな自然」11月28日に岩手県立博物館でロレックス・インスティテュートの協賛を得て開催。地方分権改革推進委員会による博物館法改正（改悪）の動きに対し反対声明を出したことがマスコミにも取り上げられた。（西田会長）博物館法の改正により地方に権利が委譲され、博物館の規定が不統一になる可能性があり、連合のような大きな団体からのアピールは重要。2011年度の予算案が審議承認された。加盟学会を39団体として分担金を予算計上した。他の連合の活動状況として、日本昆虫科学連合設立（7月）／日本分類学会連合（分類学に関連する学協会）10回目のシンポ開催／生物科学学会連合（西田）連合としての活動を増やしていく。IUBSとの連携を高め、基礎科学を高める活動を行う。学術会議など国内での認知度を高めることを目指す（自然史科学は学術会議で基礎科学とは位置付けられていない）。来年の総会で代表選挙が行われる。

3) 「地質の日」事業推進委員会：第4回事業推進委員会が9月29日産総研臨海副都心センター別館で開催。2010年度「地質の日」関連事業報告：全国79の機関・団体で119イベント開催。参加者数合計236,760人。ジオパークとリンクした事業展開を期待。2009年度収入143,832円（地質ニュース原稿料寄付）、支出131,040円（主にポスター印刷・発送）、残金122,921円。地質ニュース休刊で財源難。現体制（委員長平田大二）継続。事務局及び地質の日ポータルサイトの維持管理は、産総研地質調査総合センター。ポスターの作成とプレス発表を行った。

4) PAGES-J国内委員会：IGBP/PAGESでは、世界中の過去2000年間の気候変動に関するデータの取りまとめに向けたPAGES 2K Initiativeの一環として、2010年8月26～27日に名古屋大で「第1回Asia 2K Workshop」を開催した。2012年の早い時期にpages newsにJapan特集を出版予定。

5) 地球惑星科学連合環境・災害対応委員会が5月28日に幕張メッセで開催され、学会代表委員として陶野郁雄会員・田力正好会員が出席。

6) 2011年日本地質学会水戸大会において、日本第四紀学会が共催して、関東平野の地質に関する以下のシンポジウムとセッションを開催予定。シンポジウム「関東盆地の地質・地殻構造とその形成史」（日本第四紀学会共催）世話人：佐藤比呂志・小田原 啓・水野清秀・鈴木毅彦、トピックセッション「関東平野の更新統層序とテクトニクス」世話人：中澤 努・鈴木毅彦・中里裕臣・水野清秀

1-6 企画（企画幹事：植木岳雪・高田将志）

1) 自然史に関する教育・アウトリーチ活動についての情報交換の場「ポスターサロン」を企画し、2010年8月22日（日）の自然史教育シンポジウムにあわせて、東京学芸大学にて開催した。全部で147件のポスター発表があった。ポスターサロンの報告は「第四紀通信」17巻5号（2010年10月）に掲載された（植木岳雪会員、遠軽町 熊谷 誠氏、産総研 佐藤由美子氏、トトロのふるさと財団 対馬良一氏、日本海洋学会 市川 洋氏、千葉 崇会員執筆）。

2) シンポジウム「近畿圏における第四紀研究の展開に向けて—大阪層群と活断層—」を企画し、2010年度学会賞受賞者講演会にあわせて、2011年1月22日（土）に奈良女子大学にて開催した。地質、植生、テクトニクス、地震災害に関する4名の講演と、2名のコメントおよび総合討論が行われた。全部で70名の参加があった。シンポジウムの報告は「第四紀通信」18巻2号（2011年4月）に掲載された（石村大輔会員執筆）。

3) 講習会「沖積層：その堆積物・堆積システム・堆積シーケンスの解析法の基礎」を、2010年9月9日（木）～11日（土）に同志社大学京田辺キャンパスで開催した。講師は同志社大学 増田富士雄氏、谷口圭輔氏、産総研 佐藤智之氏、福岡大学 石原与四郎氏で、シーケンス層序学の概要やこれからの沖積層研究についての講義、柱状図やパソコンを用いた実習、水路実験の見学を行った。参加者は18名であった。講習会の報告は「第四紀通信」17巻6号（2010年12月）に掲載された（谷川晃一朗会員執筆）。

4) 「学校教育で地学は生き残れるか？：学会と教育現場との連携に向けて」を第四紀研究別冊号（論文23編、179ページ）として2011年4月に発行した。

5) 文部科学省から公募があった平成23年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）に応募し、採択された。

6) 文部科学省から公募があった『一家に1枚』シリーズポスターに応募したが、不採択であった。

## 2. 2010年度決算報告・会計監査報告

百原幹事長より配布資料に基づき説明があった。続いて、2010年度の会計が適正に運用されたことを確認した旨、水野清秀会計監査、松浦秀治会計監査より報告があった。（本号資料1「2010年度収支決算報告」、資料2「貸借対照表」、資料3

「2010年度会計監査報告」、資料5「2010年度業務委託報告」参照)

### 3. 研究委員会報告

“地球温暖化問題”を検討する研究委員会(代表:陶野郁雄)、東アジアにおける酸素同位体ステージ3の環境変動と考古学研究委員会(代表:小野昭)、古気候変動研究委員会(代表:公文富士夫)、テフラ・火山研究委員会(代表:長岡信治)、古地震・ネオテクトニクス研究委員会(代表:吾妻 崇)の委員会活動について、配布資料に基づき、代表者もしくは委員会メンバーから報告が行われた。(本号「2010年度研究委員会活動報告」参照)

4. 法務委員会報告(法務委員会委員長:水野清秀)  
法務委員会を2回開催した。水野清秀会員を委員長に選任した。申し立てについて検討した。

5. 選挙管理委員会報告(選挙管理委員会委員長:近藤玲介)

2011～2012年度評議員・役員選挙の運営を行った。委員会は幹事会より推薦された、中島礼・近藤玲介・齋藤めぐみ・大上隆史・工藤雄一郎・村田昌則の各委員で構成され、互選により近藤が委員長に就任した。

評議員選挙は全会員を有権者にして投票が行われ、2011年5月28日の開票で、41名の評議員が選出された。次いで新評議員を有権者とした役員選挙が行われ、6月25日の開票で会長に遠藤邦彦、副会長に小野 昭、竹村恵二、会計監査に大場忠道、百原 新、互選幹事に池原 研、植木岳雪、岡崎浩子、久保純子、須貝俊彦、長橋良隆、水野清秀が選出された。

メーリングリストで3回の投票呼びかけ(内、1回は会告相当)を行うとともに、投票日締め切り直前の連合大会第四紀セッションで、口頭で投票呼びかけを行った。併せて、第四紀学会ホームページ上に選挙会告を掲載した。これらの効果のためか投票率は前回と同一の約18%となった。しかし、投票率はまだ低いのが現状である。そのため、今後も選挙の呼びかけと投票の煩雑さの軽減などの投票しやすい環境を整える努力をしていくべきである。

評議員選挙の投票率が低い要因の一つとして、投票方法の煩雑さが挙げられ、抜本的な投票方式の改革が求められる。また、「共通分野」の意義が分かりにくく、本来の狙い通りに機能しているか疑問が残る。共通分野で地質や地理の評議員数が増え、その結果として、規模の小さな専門分野の意見が埋没することはないか、議論すべきである。

以上について、選挙規約の改定も含め幹事会で検討する必要がある。

### 6. 学会賞・学術賞受賞者選考報告

第3回評議員会で決定した学会賞・学術賞の選考報告について、百原幹事長より経緯の説明が行われた。(本号「2011年日本第四紀学会学会賞・学術賞選考報告」参照)

### 7. 論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

第3回評議員会で決定した論文賞・奨励賞の選考報告について、百原幹事長より経緯の説明が行われた。(本号「2011年日本第四紀学会論文賞・奨励賞選考報告」参照)

### 8. 功労賞選考報告(幹事会)

百原幹事長より受賞者の紹介と選考の経緯についての説明が行われた。(本号「2011年日本第四紀学会功労賞選考報告」参照)

9. 第19回INQUA大会日本招致準備委員会活動報告  
齋藤文紀委員長より委員会の活動経過とINQUAベルン大会での招致活動および招致成功の報告が行われた。(本号「第19回INQUA大会日本招致準備委員会活動報告」参照)

### 10. 第21期日本学術会議 地球惑星科学委員会 INQUA分科会報告(奥村晃史分科会長)

奥村晃史分科会長より委員会について報告が行われた。(本号「第21期日本学術会議 地球惑星科学委員会 INQUA分科会報告」参照)

## II 審議事項

1. 2011年度事業計画(2011年8月1日～2012年7月31日)

#### 1-1 庶務

- 1) 総会・評議員会・幹事会を開催する。
- 2) 会員名簿の管理および発行を行う。
- 3) 学会賞・学術賞受賞者選考および論文賞・奨励賞受賞者選考に関する業務を行う。
- 4) 名誉会員選考に関する業務を行う。
- 5) 転載許可・受け入れ図書 of 整理を行う。
- 6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。
- 7) 日本学術振興会賞などの賞への学会推薦を行う。
- 8) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

#### 1-2 会計

- 1) 研究委員会の予算の調整を行う。
- 2) その他会計に関する業務を行う。

#### 1-3 行事

- 1) 2011年8月26日～29日に鳴門教育大学を会場として、日本第四紀学会2011年大会を実施する。
- 2) 日本第四紀学会2012年大会を2012年8月に立正大学で開催するため、立正大学関係者を中心として検討し、その準備を行う。
- 3) 2011年学会賞・学術賞受賞者講演会を実施する。
- 4) 2013年以降の日本第四紀学会大会の準備を行う。

#### 1-4 編集

- 1) 2011～2012年度編集委員会を組織し、第四紀研究の編集にあたる。
- 2) 「第四紀研究」第50巻5号、6号、第51巻1号、2号、3号、4号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGEを通じて、電子ジャーナルとしての刊行を行う。
- 3) 2011年大会シンポジウム特集号編集委員会を設置し、企画・編集などにあたる。
- 4) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整

理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

#### 1-5 広報

- 1) 広報委員会を組織して、第四紀通信の編集およびホームページの維持管理を行う。
- 2) 「第四紀通信 (QR News Letter)」 Vol.18 No.5 (2011年10月)、同 No.6 (2011年12月)、Vol.19 No.1 (2012年2月)、同 No.2 (2012年4月)、同 No.3 (2012年6月) および同 No.4 (2012年8月) を発行する。
- 3) 「第四紀通信」上記各号の電子版 (pdf 版) を、それぞれ発行前月の中旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。また電子ファイルが保存されていない特定の号についてはスキャニングと pdf ファイル化を行う。
- 4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。
- 5) 日本第四紀学会ホームページ用サーバの閉鎖 (国立情報学研究所; 2012年3月) に伴い、サーバ移転先を検討し、データ移動等を行う。
- 6) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。
- 7) 日本第四紀学会評議員会メーリングリストおよび日本第四紀学会幹事会メーリングリストの管理を行う。
- 8) 日本第四紀学会ホームページ英語版の充実を引きつづき図る。

#### 1-6 渉外

日本地球惑星科学連合をはじめ、自然史学会連合等国内関連学協会との連携を高めていく。とくに地球惑星科学連合における日本第四紀学会の認知度と活動度を高めるために、

- 1) 渉外委員会を新たに設置し (審議事項 4 参照)、第四紀学の幅広い専門性を生かした組織としての渉外活動の展開を目指す。
- 2) 地球惑星科学連合代議員選挙に向けて、前回選挙と同様、学会として、大気海洋・環境、地球人間圏、固体地球、地球生命圏、の各セクションに、それぞれ複数の推薦候補を立てる (立候補期間は 8 月 15 日～9 月 15 日)。
- 3) 連合大会セッションについて、旧『第四紀』セッションを継承する『ヒト-環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層古地震』ならびに『平野地質-第四紀層序と地質構造-』を第四紀学会が開催するメインセッションと位置付け、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、ジオパークをはじめ第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる (セッション提案期間は 9 月 1 日～10 月中旬頃)。

#### 1-7 企画

- 1) 文部科学省・平成 23 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) による学会主催の活動として、2011 年大会にあわせて 2011 年 8 月に普及講演会「徳島で考える地震津波と防災～東日本大震災からの新たな教訓」とアウトリーチ巡検「百万年前の東四国を探る」を、2012 年 2 月に独自のアウトリーチイベントを徳島で企画し、開催する。

また、平成 24 年度科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) に応募する。

- 2) 2012 年 1 月と 6 月に、学会賞・学術賞受賞者講演会と関連シンポジウムを関西で企画し、開催する。
- 3) 講習会を関東で企画し、開催する (時期は未定)。
- 4) 文部科学省が公募する『一家に 1 枚』シリーズポスターに応募する。

#### 2. 2011 年度予算

配布資料に基づき、池原 研幹事から説明があり、承認された。(本号資料 4「2011 年度予算案」、資料 6「2011 年度業務委託費見積」参照)

#### 3. 会費の減免についての会則の改正

災害による罹災等によって会費の納入が困難になった会員に対応するため、会費の納入に関する会則第 7 条に会費の減免を可能にする条文を会則第 7 条に追加することを総会へ提案することについて幹事会から説明があり、承認された。(本号「会則の一部改訂について」参照)

#### 4. 「投稿規定」、「執筆要項」の改定

投稿原稿の編集作業を容易かつ迅速に進めるため、「投稿規定」の一部改訂について編集委員会の池原 研委員長から提案があり承認された。また「執筆要項」の一部改訂について説明された。(本号「『投稿規定』『執筆要項』の改定」参照)

#### 5. 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会の設置

2011 年 INQUA 第 18 回大会において 2015 年に INQUA 第 19 回大会を名古屋で開催することが決定したことを受けて、日本学術会議の INQUA 分科会から「国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会」の設置について提案されたことの報告があり、審議した結果、承認された。

#### 6. 教育・アウトリーチ委員会の設置

近年、研究成果の社会への還元と学校教育・生涯教育への貢献など、学会としての社会的な説明責任が求められていることを受けて、教育とアウトリーチ活動を取り扱う幹事会から独立した専門委員会の設置することが幹事会から提案され、承認された。(本号「教育アウトリーチ委員会の設置について」参照)

#### 7. 渉外委員会の設置

国内の関連諸学会、諸団体との連携の拡大・深化をはかることを目的とした渉外委員会を設置することが幹事会から提案され、承認された。(本号「渉外委員会の設置について」参照)

#### 8. その他

「第四紀研究」編集作業の迅速化に関して評議員より提案があり、審議した。提案の一部については今回の「編集規定」の改定により解消されることが確認された。

資料(1) 2010年度収支決算報告書  
(2010年8月1日から2011年7月31日)

## 収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会費収入	12,398,500	11,857,490	-541,010	
正会員会費収入	12,118,500	11,617,490	-501,010	通常会員(過年度)会費 11,235,000円(878,000円) 学生会員会費 310,000円 海外会員会費 72,490円
賛助会員会費収入	280,000	240,000	-40,000	20,000円×10社(12口)
誌代	1,800,000	1,951,056	151,056	別冊号購入279,600円, 定期雑誌購入, 要旨集売上
別刷代・超過頁代収入	800,000	893,742	93,742	第四紀研究 49巻4号～50巻3号, 別冊号236,500円
雑収入	200,000	176,903	-23,097	2010年大会余剰金132,142円
利子収入	10,000	5,220	-4,780	
広告料収入	200,000	320,000	120,000	別冊号広告320,000円
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	300,000	300,000	0	
名簿作成積立金取崩収入	1,000,000	0	-1,000,000	
収入合計	17,058,500	15,854,411	-1,204,089	
前期繰越金	6,227,415	6,227,415	0	
合計	23,285,915	22,081,826	-1,204,089	

## 支出の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	増 減	摘 要
会誌発行費	7,040,000	6,166,686	873,314	
印刷費	3,600,000	2,848,287	751,713	第四紀研究 49巻4号～50巻3号
編集費	1,500,000	1,576,479	-76,479	
編集人件費	1,440,000	1,440,000	0	編集書記人件費
別刷印刷費	500,000	301,920	198,080	第四紀研究 49巻4号～50巻3号
会誌・会報発送費	700,000	722,807	-22,807	第四紀研究 49巻4号～50巻3号
会報発行費	910,000	748,559	161,441	
印刷費	700,000	589,890	110,110	第四紀通信 17巻4号～18巻3号
編集費	10,000	2,969	7,031	
編集人件費	200,000	155,700	44,300	会報編集人件費
大会運営準備金	400,000	400,000	0	2011年用
巡検準備金	100,000	100,000	0	2011年用
講演会・シンポジウム費	200,000	152,400	47,600	アルバイト代等
予稿集印刷費	500,000	525,000	-25,000	2010年大会(本冊500部)
学会賞費	200,000	214,980	-14,980	副賞および賞状筆耕代, 諸経費
講習会費	100,000	8,000	92,000	
通信費	300,000	347,140	-47,140	会費請求書発送郵送費等
会議費	100,000	32,000	68,000	評議員会会場費
旅費・交通費	800,000	397,090	402,910	幹事会(計4回)等交通費
印刷費	400,000	378,247	21,753	総会資料, 封筒代, コピー代等
業務委託費	2,836,995	2,550,975	286,020	資料(5)参照
デジタルブック最新第四紀 学CD出版費	800,000	0	800,000	
INQUA対策費	400,000	129,360	270,640	INQUA招致準備資料等
役員選挙費	700,000	637,038	62,962	2011-2012年度役員選挙
名簿作成費	1,500,000	177,640	1,322,360	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	0	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	0	
研究委員会助成金支出	250,000	32,250	217,750	
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	0	地球惑星科学連合、自然科学連合分担金
特別委員会活動費	0	0	0	
雑費	100,000	1,047,747	-947,747	別冊号製作費919,737円、振込手数料 他
予備費	200,000	0	200,000	
支出合計	19,066,995	15,297,919	3,769,076	
次期繰越金	4,218,920	6,783,907	-2,564,987	
合計	23,285,915	22,081,826	1,204,089	

資料(2) 貸借対照表および財産目録

貸借対照表  
(2011年7月31日現在)

(単位:円)

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
流動資産	6,340,907	流動負債	207,000
小口現金	347,110	前受会費	207,000
現金(事務局)	49,461		
郵便振替	3,884,310	正味財産	17,783,907
普通預金	2,030,026	名簿作成積立金	1,000,000
未収金	30,000	INQUA対策積立金	0
		役員選挙費積立金	0
固定資産	11,650,000	予備費積立金	10,000,000
定期預金	11,650,000	次期繰越金	6,783,907
		(前期繰越金)	6,227,415)
		(当期収支差額)	556,492)
合計	17,990,907	合計	17,990,907

財産目録  
(2011年7月31日現在)

(単位:円)

資産の部

科目	摘要	金額
小口現金	編集書記手許金	347,110
現金	事務局手許金	49,461
郵便振替	年会費振込専用口座	3,884,310
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	1,842,591
普通預金	中央三井信託銀行本店営業部	187,435
未収金	日本第四紀学会広告料	30,000
流動資産合計		6,340,907
定期預金	みずほ銀行早稲田支店	1,650,000
定期預金	中央三井信託銀行本店営業部(予備費積立金)	10,000,000
固定資産合計		11,650,000
合計		17,990,907

負債の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
前受会費	2011年度以降年会費	207,000
合計		207,000

正味財産の部 (単位:円)

科目	摘要	金額
名簿作成積立金	2010年度名簿作成積立金	1,000,000
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	0
役員選挙費積立金	役員選挙費積立金	0
予備費積立金	予備費積立金	10,000,000
次期繰越金		6,783,907
	前期繰越金	6,227,415
	当期収支差額	556,492
合計		17,783,907

資料 (3)

日本第四紀学会

会長 遠藤 邦彦 殿

2010年度会計監査報告書

2011年8月2日(火)、東京大学において日本第四紀学会2010年度収支決算報告書(2010年8月1日～2011年7月31日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。

ここにご報告いたします。

以上

2011年8月2日(火)

会計監査 水野 清乃 

会計監査 松浦 秀治 

資料（４） 2011年度予算案  
(2011年8月1日から2012年7月31日まで)

収入の部 (単位：円)

科 目	2010年予算額	2010年決算額	2011年予算案	摘 要
会費収入	12,398,500	11,857,490	11,708,000	
正会員会費収入	12,118,500	11,617,490	11,448,000	9,000円×1,300名×95%+(学生5,000円×50名×90%)+(海外会員120,000円×90%)
賛助会員会費収入	280,000	240,000	260,000	20,000円×10社(13口)
誌代	1,800,000	1,951,056	1,800,000	Back No., 定期雑誌仕入, 予稿集売上等
別刷・超過頁代収入	800,000	893,742	800,000	
雑収入	200,000	176,903	200,000	JST、著作権料収入等
利子収入	10,000	5,220	5,000	
広告料収入	200,000	320,000	200,000	
役員選挙積立金取崩収入	350,000	350,000	0	
INQUA対策積立金取崩収入	300,000	300,000	0	
名簿作成積立金取崩収入	1,000,000	0	1,000,000	
予備費積立金取崩収入	0	0	2,000,000	
科研費補助金・助成金収入	0	0	1,400,000	
収入合計	17,058,500	15,854,411	19,113,000	
前期繰越金	6,227,415	6,227,415	6,783,907	※11年度前期繰越金は10年度予算より計上
合計	23,285,915	22,081,826	25,896,907	

支出の部 (単位：円)

科 目	2010年予算額	2010年決算額	2011年予算案	摘 要
会誌発行費	7,040,000	6,166,686	6,440,000	第四紀研究 50巻4号～51巻3号 計6号
会誌印刷費	3,600,000	2,848,287	3,000,000	
会誌編集費	1,500,000	1,576,479	1,500,000	
会誌編集人件費	1,440,000	1,440,000	1,440,000	編集書記手当
会誌別刷印刷費	500,000	301,920	500,000	
会誌・会報発送費	700,000	722,807	700,000	第四紀研究 50巻4号～51巻3号 計6号
会報発行費	910,000	748,559	810,000	第四紀通信 18巻4号～19巻3号 計6号
会報印刷費	700,000	589,890	600,000	第四紀通信印刷費
会報編集費	10,000	2,969	10,000	第四紀通信編集費
会報編集人件費	200,000	155,700	200,000	第四紀通信編集アルバイト代
大会運営準備金	400,000	400,000	400,000	2012年大会用
巡検準備金	100,000	100,000	100,000	2012年大会用
講演会・シンポジウム費	200,000	152,400	200,000	
予稿集印刷費	500,000	525,000	500,000	2011年大会講演要旨集
学会賞費	200,000	214,980	200,000	副賞(50,000円×1名として), 賞状作成費
講習会費	100,000	8,000	100,000	
通信費	300,000	347,140	300,000	会費請求書発送郵税, 事務通信費等
会議費	100,000	32,000	100,000	評議員会会議費等
旅費・交通費	800,000	397,090	400,000	幹事会等交通費
印刷費	400,000	378,247	400,000	学会専用封筒, 総会資料印刷, コピー代金
業務委託費	2,836,995	2,550,975	2,277,870	
デジタルブック最新第四紀学CD出版費	800,000	0	0	
INQUA対策費	400,000	129,360	2,000,000	
役員選挙費	700,000	637,038	0	
名簿作成費	1,500,000	177,640	1,500,000	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙費積立金繰入支出	0	0	350,000	
名簿作成積立金繰入支出	0	0	0	
予備費積立金繰入支出	500,000	500,000	500,000	
研究委員会助成金支出	250,000	32,250	250,000	50,000円×5委員会で算出
加盟学協会分担金支出	30,000	30,000	30,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金
科研費補助金・助成金支出	0	0	1,400,000	
雑費	100,000	1,047,747	100,000	振込手数料等
予備費	200,000	0	200,000	
支出合計	19,066,995	15,297,919	19,257,870	
次期繰越金	4,218,920	6,783,907	6,639,037	
合計	23,285,915	22,081,826	25,896,907	



**資料（５） 2010年度業務委託費  
(2010年8月1日～2011年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,479,500</u>
1. 会員管理費	1,005,900 ( 1,437件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	15,600 ( 13件× 1,200円)
(賛助会員)	11,000 ( 11件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	207,000 ( 計 8,280件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000 ( 計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	234,000 ( 130箱× 1,800円/6ヵ月)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>34,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>126,000</u> ※別刷請求手数料他
	※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>121,475</u>
合 計	<u>2,550,975</u>

**資料（６） 2011年度業務委託費見積  
(2011年8月1日～2012年7月31日)**

I. 会員業務費用	<u>1,229,400</u>
1. 会員管理費	980,000 ( 1,400件× 700円)
2. 特別請求書発行手数料 (海外会員)	14,400 ( 12件× 1,200円)
(賛助会員)	11,000 ( 11件× 1,000円)
3. 学会誌送信用ラベル作成・貼付・納品	200,000 ( 計 8000件× 25円)
学会誌送信用ラベル出力手数料	6,000 (計 6回× 1,000円)
4. 学会誌保管費用	18,000 ( 5箱× 3,600円/年)
II. 受付業務費用	<u>360,000</u> (@30,000円/月)
III. 会計業務費用	<u>430,000</u> ※年間
IV. 庶務業務費用	<u>50,000</u> ※事務局幹事会・評議員会出席費用
V. その他	<u>100,000</u> ※別刷請求手数料他
	※メーリングリスト費用
消費税負担額 5%	<u>108,470</u>
合 計	<u>2,277,870</u>

## ◆日本第四紀学会 2011 年総会議事録

日時：2011 年 8 月 27 日（土）11:10～12:00

場所：鳴門教育大学 講義棟 B101

議長：公文富士夫会員

出席会員数：89 名、委任状 147 通

三浦前行事幹事の司会により、まず大会実行委員長の米延仁志会員のあいさつが行われた。続いて遠藤邦彦会長のあいさつで、3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震による被災者へのお見舞いの言葉があり、地震で亡くなられた方へ黙祷をささげた。その後、公文富士夫会員を議長に選出し、定数確認後、配布資料に基づき下記の報告および審議が行われた。

### I. 報告事項

#### 1. 2010 年度事業報告

百原前幹事長より各事業の報告（本号「第 1 回評議員会議事録」に掲載）が行われ、2010 年度に逝去された会員に対して黙祷をささげた。

#### 2. 2010 年度決算報告・会計監査報告

資料に基づき、池原会計幹事より 2010 年度会

計決算報告、水野会計監査より会計監査報告が行われた。

#### 3. 2010 年度各委員会等報告

百原前幹事長より、新役員、学会賞・学術賞、論文賞・奨励賞、功労賞受賞者などの報告がなされた。また、INQUA 招致準備委員会の齋藤委員長より、2015 年 INQUA 大会が名古屋開催に決定されたこと、それに向けて積極的な提案や協力をお願いすることが述べられた。

### II. 審議事項

#### 1. 2011 年度事業計画

百原前幹事長より、学会活動方針が提示され、承認された。

#### 2. 2011 年度予算

池原幹事より、資料に基づき、2011 年度予算案が提示され、承認された。

#### 3. 会則改訂

百原前幹事長より、災害による罹災等によって会費の納入が困難になった会員に対応するため、会費の納入に関する会則第 7 条に会費の減免を可能にする条文追加が提案され、承認された。

## ◆日本第四紀学会 会則

- (1956 年 4 月 29 日、総会にて決定)
- (1995 年 8 月 26 日、総会で一部改正)
- (2002 年 8 月 24 日、総会で一部改正)
- (2004 年 8 月 28 日、総会で一部改正)
- (2005 年 8 月 27 日、総会で一部改正)
- (2009 年 8 月 29 日、総会で一部改正)
- (2010 年 8 月 21 日、総会で一部改正)
- (2011 年 8 月 27 日、総会で一部改正)

### 第 1 章 総 則

第 1 条 本会は日本第四紀学会 (Japan Association for Quaternary Research) という。

第 2 条 本会は第四紀を中心とする諸問題を、関係各分野の協力により解明し、第四紀学の進歩と普及をはかることを目的とする。

第 3 条 本会は第 2 条の目的を達成するために下記の事業を行なう。

1. 会誌、第四紀通信誌、その他の出版物の発行、電子媒体等による情報発信。
2. 学術講演会、普及講演会、談話会、講習会、野外見学会等の企画開催。
3. 研究委員会等による研究および調査の推進。
4. 研究の奨励および業績・功労の表彰。
5. 内外の関連学協会との研究協力および連絡。
6. その他目的を達成するために必要な事業。

第 4 条 本会会則の変更は総会の議決によって行なう。

### 第 2 章 会 員

第 5 条 本会は第四紀学に関心を持つ会員で組織する。会員は会誌等の配布を受け、第 3 条に規定した事業を享受する、あるいは事業に参加する権利を有する。また、会員は会則と倫理憲章を遵守する義務を負う。

第 6 条 会員は正会員、名誉会員および賛助会員

の 3 種とする。正会員および名誉会員は第 2 条の目的達成に寄与する個人とし、賛助会員は第 2 条の目的を賛助する個人および法人とする。名誉会員は第四紀学について顕著な功績ある正会員の中から評議員会が推薦し、総会の議決によって定める。なお、名誉会員の選考規定は別に定める。

2. 会員になろうとするものは、本会会則および倫理憲章に同意の上、入会申込書を会長宛に提出しなければならない。また、本会を退会しようとする会員は、会長宛に退会届を提出することとする。

3. 1 年以上、会費を滞納した会員は、評議員会の議をへて、除籍されることがある。

4. 会員が不正行為等を行った場合には、法務委員会の議により除名あるいは会員の資格停止等の処分を受けることがある。また、会員は不正行為等があったとする申し立てを行うことができる。なお、これらの細則は別に定める。

第 7 条 会員は総会の議決によって定められた会費を納めねばならない。会費は前納とし、年額、正会員は 9000 円（但し、学生・院生は 5000 円）、賛助会員は一口（20000 円）以上とする。名誉会員は会費の納入を要しない。

2. 特別な事情がある場合、会費の減免をすることができる。

### 第 3 章 総 会

第 8 条 総会は正会員を持って組織し、欠席した正会員の委任状を含み全正会員の 10 分の 1 以上の出席がなければ、成立しない。出席した正会員は 2 名以上の欠席した正会員の委任を受けるとは出来ない。総会は各年度につき 1 回以上会長が招集し、本会の基本方針を決定する。

第 9 条 名誉会員は総会に参加し、意見を述べる

ことができる。

第4章 役員および評議員会、幹事会、委員会

第10条 本会の役員は、会長1名、副会長2名、会計監査2名、評議員互選幹事7名、会長推薦幹事5名以内および役員選挙規定で定める数の評議員とする。役員任期は2年とし、会長および副会長はそれぞれ合算して2期(4年)を超えることはできない。評議員は6期以上、会計監査は2期以上、幹事は3期以上連続して就任できない。なお、幹事任期は合算して4期(8年)を超えることはできない。

第11条 評議員は正会員の中から互選される。ただし、会長経験者は被選挙権を有しない。会長・副会長・会計監査は正会員の中から評議員会において選出され、幹事は評議員の互選と会長の推薦による。会長推薦幹事については、正会員から選ばれ、評議員会の承認を必要とする。評議員および評議員互選幹事任期を半年以上残した時点で欠員が生じた場合、次点者を補充することができる。

第12条 会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。また、副会長は、幹事会の役割分担の及ばない範囲に生ずる会務を行う。

第13条 評議員は評議員会を構成し会則第2条に定める本会の基本方針に基づき、本会の運営に関する案件を審議決定する。また、本会会則の施行に係わる細則(細則、規定、内規など)を決定する。

2. 評議員会は評議員の3分の1以上の出席(委任状を含む)をもって成立する。ただし出席した評議員は2名以上の欠席した評議員の委任を受けることはできない。

3. 会長・副会長・会長経験者および会長推薦の幹事は、評議員会に出席し、意見を述べることができる。

4. 評議員会は各年度につき2回以上会長が招集する。

第14条 幹事会は幹事により構成され、会長及び副会長とともに本会の運営に関する会合を定期的に開催する。会長は必要に応じて幹事以外の者を幹事会に出席させることができる。幹事は幹事長を互選する。幹事会は、庶務、法務、会計、編集、行事、企画、広報、渉外などの会務を執行し、各年度につき1回以上、評議員会・総会に会務の執行状況を報告し、必要な案件を提案する。

2. 幹事会は会務を執行するため、各会務に関する常設委員会を置くことができる。各常設委員会の委員は幹事会が正会員の中から選び、会長が委嘱する。会長は必要に応じて、非会員に外部委員を委嘱できる。

3. 幹事会は必要に応じ、評議員会の承認を得て期限を定めた特別委員会を置くことができる。

第15条 本会に、不正行為等の疑義のある会員に対して裁定を行う法務委員会を置く。

2. 本会に特定の研究を推進する研究委員会を置く。

3. それぞれの細則は別に定める。

第5章 会計

第16条 本会の経費は、会費、寄付金、補助金等による。

第17条 本会の会計年度は毎年8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わる。

第18条 本会の会計は毎年総会の前に監査を受けるものとする。

第6章 細則

第19条 本会会則の施行に係わる細則は別に定める。

付則1 本会事務局は東京都新宿区大久保2丁目4番地12号(〒169-0072)新宿ラムダックスビル10階に置く。

付則2 本会則は2011年9月1日より施行する。

◆平成24年度笹川科学研究助成の募集について

この度若手研究者への研究奨励として、「平成24年度笹川科学研究助成」の募集を行うこととなりました。詳細は、下記Webサイトをご覧ください。

<http://www.jss.or.jp/sasagawa/index.html>

募集期間：平成23年10月1日～平成23年10月14日

### ◆ “東海地震” 防災セミナー 2011[ 第 28 回 ] のお知らせ

昭和 59 年以來、毎年静岡市で開いてきましたが、本年も下記のとおり開催致します。関心をお持ちの方々のご参加を期待します。

日 時：平成 23 年 11 月 10 日（木）13:30 ～ 16:00

会 場：静岡商工会議所静岡事務所 5 階ホール（JR 静岡駅北口西側）

テーマ：東日本大震災に学ぶ

座 長：静岡大学理学部地球科学科 静岡大学防災総合センター 教授 里村 幹夫

1. 最近の研究から明らかになった東海・東南海・南海地震の連動発生の可能性とその影響

東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター

東京大学地震研究所自然災害系研究部門

教授 古村孝志

2. 減災社会を築く

静岡県危機管理部 危機報道監 岩田孝仁

主 催：東海地震防災研究会

連絡先：〒 422-8035 静岡市駿河区宮竹 1-9-24 土研究事務所 土 隆 一

Tel : 054-238-3240 Fax : 054-238-3241

### ◆千葉県立中央博物館 平成 23 年度秋の展示 「砂のふしぎ」

砂はどのようにしてできるのでしょうか。どんなふうに動くのでしょうか。砂は音を出したりもします。意外と知られていない砂の不思議を紹介します。

【会場】本館 企画展示室

【会期】2011 年 10 月 1 日（土）～ 12 月 4 日（日）

【開館時間】9:00 ～ 16:30（入館は 16:00 まで）

【休館日】毎週月曜日（ただし、10/10 は開館、10/11 は閉館）

【入場料】一般 300 円・高大学生 150 円 ※ 11/3 文化の日は無料

※次の方は入場料が無料です。中学生以下／65 歳以上の方（年齢を示すものをご提示ください）

【お問合せ先】

〒 260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2（青葉の森公園内） 千葉県立中央博物館

[ 電話 ] 043 265 3111（代表） [ ファクス ] 043 266 2481

ホームページ：<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

後援 日本第四紀学会、日本堆積学会

●講演会「砂の不思議—鳴り砂と液化化—」

10 月 9 日（日）13:00 ～ 15:00 [ 当日先着 200 名 ] 講堂

講師：山口大学教授・宮田雄一郎氏

### ★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：兵頭政幸（[mhyodo@kobe-u.ac.jp](mailto:mhyodo@kobe-u.ac.jp)）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 神戸大学 内海域環境教育研究センター 兵頭政幸

〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 FAX : 078-803-5757

広報委員：糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒 169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : [daiyonki@shunkosha.com](mailto:daiyonki@shunkosha.com) 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176